

日本國語大辭典

第十四卷

編集 日本大辭典刊行会
発行 小学館

日本国語大辞典 第十四卷

昭和五十年三月一日 第一版第一刷発行 ©
昭和五十五年七月一日 第一版第六刷発行

編集 日本大辞典刊行会

発行者 相 賀 徹 夫

印刷者 小 林 清

発行所 株式会社 小 学 館

東京都千代田区一ツ橋二一三ー一
〔郵便番号〕一〇二〔振替〕東京八二二〇〇

造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

Printed in Japan

編集顧問

金田一京助
佐伯梅友
新村出
時枝誠記
西尾実
久松潜一
諸橋轍次
山岸徳平

編集委員

市古貞次
金田一春彦
見坊豪紀
阪倉篤義
中村通夫
西尾光雄
林井栄大
松井栄一
馬淵和夫
三谷栄一
山田栄巖
吉田精一

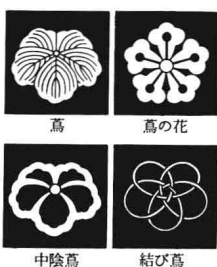
(五十音順)

つた【苳・寸・莎】『名』（「すさ（苳）」の変化した語）壁土にまぜて龜裂を防ぐつなぎとする切藁・屑麻など。

発音 〔標ア〕〇夕

つた」(眞)『名』①ブドウ科の落葉性つる植物。各地の山林、岩壁、石垣などに生え、秋の紅葉が美しく盆栽にしたり壁や石垣などにはわせる。葉の反対側に巻ひげが出るが二節続いで出ると次の一節には出ない性質がある。また巻ひげは小形で枝分れし先端に吸盤があつて、他物に吸着する。葉は長柄をもち掌状に二―三裂するが、卵形の三個の小葉からなる。夏、短枝の先端に短い花序を出し黄緑色の小さな五弁花を結ぶ。果実は球形の液果で紫黒色に熟す。和名は「つた」の意からなり、真名は「肥田」也。つたは、

佐々木忠からといふ。澤名、祇山、虎地錦、なづな
 つたもみじ。紅葉つた。《季秋》・万葉二・三三五
 「さ寝し夜はいくだもあらず 這ふ都多(ツタ)の別
 れし来ればは柿本(カキモ)人麻呂」・伊勢物語九「わが入ら
 むとする道は、いと暗う細きに、つたかえでは茂り」
 ・本草和名「落石(ハゲシ)和名都多」・色葉字類抄「落石
 ツタ 領石 同 合動同」・文明本節用集「羅ツタ 見
 詩 薦 同 或作落石 落石玉簫(リョクシキヨウ)寄生也云々」・俳諧
 甲子吟行「薦植て竹四五本のあらし哉(芭蕉)」・日本
 植物名彙編「松村任三「ツタ 地錦」 ②紋所の名。薦
 の葉をかたどつた



もの。蔦蔦の花、中陰蔦、結び蔦などがある。＊雑俳：柳多留――「ぬけ参り蔦に取つて登る也」③「つたむすび（蔦結）」の略。④①植物のつる。瓜のつたに茄子はならな

い) 福島県石川郡 ② 植物、いたびかずら(崖石櫛)
愛媛県宇摩郡関川 ③ 植物、おおいたび(大崖櫛)。
高知県幡多郡 ④ 植物、ごとうづる(後藤薔)。秋田
県鹿角郡 ⑤ 愛媛県・高知県土佐郡 ⑤ 植物、いわが
らみ(岩絡)。香川県香川郡塩江・愛媛県・高知県 ②
⑥ 植物、つたうし(鳥漆)。甲斐河口 ② 愛媛県新居
郡 高知県 ② 植物、まさきかずら(枉莖)。長野県
佐久 ④ 鳥根県嬬川郡平田 ⑦ 愛媛県宇摩郡新立・高
知県 ⑧ 植物、さるなし(猿梨)。愛媛県上浮穴郡面
河 ⑨ 植物、ていかかずら(定家葛)。岡山県苫田郡
731 鳥根県嬬川郡平田 ⑦ 高知県 ⑧ ⑩ 植物、へくそか
ずら(屁菟葛)。岡山県御津郡横井 ⑦ ① 植物、さるお
がせ(猿麻桂)。神奈川県津久井郡 286 關國(關)ツタフ
(伝)の義、和句解 日本釈名・滑稽雜説所引和訓義解
東雅・言元梯・和訓雅 國語の語根とその分類大島正
健。(2) ツタツナ(付綱)の反名語記。(3) 類々ね結
ぶのに用いたところからか(日本語源賀茂百樹)。
(4) 物を結い つなぐものとして用いたところからツナ
(綱)の義(古事記伝)。(5) ツタヒ ハヒ(伝這)の義(日

本語原学ニ林瓊臣。 (6) ツツラ (蔓) の義か [名言通]。
 [発音] 儻々 [タ] 今忠平安 ● ○ 今ア ツ [古辞書] 和名・色葉
 名義・下学・和玉・文明・伊京・明応・天正・鯉頭・黒本・易林・書言

名義・下学・和玉・文明・伊京・明応・天正・鰻頭・黒本・易林・書言

つたの庵(いお) 蕙がはいまわって、その下に隠れている庵。隠者の住む庵。・新統古今 露族・九五九「宇津の山月だにもらぬ蕙の庵に夢路絶えたる風の音哉へ藤原家隆」

つたの下道(したみち) つた(鳶)の細道に同じ
 *新古今・隠旅 九八二「都にもいまや衣をうつ中山
 夕霜はらふつたの下みちへ藤原定家」 *海道記 左
 川より手越「足に任する者は、苔の岩根、勸の下路
 嶮難に堪へず」

たの蔓（つる）は恨（にく）むらみ（蔓は係累の意）にはう蔦が軒（のき）のくに居（ゐ）こうとするのを「退（ひ）き」にかけて、相手と手を切ろうとするの意を表わす「壁に蔦の諺から」男が女との関係を切ろうとする気持に對して、女の係累が同情して恨むと。＊雜俳・かぐや姫「腰本も旦那へ蔦の蔓うらみつたの年越（としこし）」岩手県で一月三日の別名。神前に餅を供えるほか、門口や部屋ごとに置

をはさむ家もある。
つたの葉(は) 蔦に生える葉。*謡曲・定家「露と消えてもつたなや蔦の葉の葛城の神姿恥づかしや由なや」*俳諧・葱摺「蔦の葉はむかしめきたる紅葉哉(芭蕉)」

つたの(細道はそみち) 葛がおいしげって幅が細くなっている道。「伊勢物語」九に「宇津の山にいたりて、わがらむとす道は、いと暗う細きにたつたえでは茂り」とあるところから、静岡市丸根(まりこ)と岡部のとの境の、山越えの道をさすのことが多い。葛の下道。*名所百首「春」宇津の

山さこそはかねて聞きしかど霞をわくる鳶のほそ道「行意」*仮名草子・竹斎下「つたのはそみちを睨の介と竹斎は、あなたこなたへぶらりしやらりぶらりしやらりと、わけ迷ひたる有様は」*滑稽本・東海道中膝栗毛二下「宇津の山にさしかかりたるに、雨は次第に篠を乱し、鳶(ツタ)のほそ道心ぼそくも」

つたの身(み) 薦が他のものにからみつくよ
に、他にたよらないでは生きて行けない身。助け
を待つ身。*大和三三「たちよらむこのもともな
きつたの身はときはながらに秋ぞかなしき」
つたの芽(め) 春になって出はじめた赤や白の草
の芽。だんごの芽(め) 春になって出はじめた赤や白の草

つたの紅葉（もみじ・もみじば） 萬の葉の紅葉したもののひとつ。＊山家集上「おもはすによりある賤の住家哉つたものみぢを軒に這はせて」＊新刻撰「秋下・三四五」あきこそあれ人はたづねぬ松の戸をいくへもとちよつたのもみぢば（式子肉親王）

つたの 若葉(わかば) 晩春のころの、 蔦の若葉。
《季・春》 ＊俳諧・毛吹草 二「草のわかば 蔦の若葉
葉菊のわかば」 ＊俳諧・類題 発句集「春」上 塗に

葉菊のわかば▽
*俳諧・類題発句集「春」上塗り

追はるる葛の若葉かなへ来」
 つた『名』〔附〕たきぎの太いもの。岐阜県大垣535
 県伊香郡616 石川県河北郡440 福井県南条郡466
 つた【津田】姓氏の一つ。〔発音〕チノ

つだゝめこ【津田梅子】教育家。東京出身。農学者津田仙の次女。明治四年（一八七二）、最初の官費女子留学生として渡米。帰国後、華族女学校教授、西渡米後、女子高等師範学校教授などを歴任。明治三三年、女子英学塾を創設、津田塾大学の基礎を築

いた。元元元年（昭和四年）（一八四一—一九二九）
つだへんもつ【津田監物】室町時代の砲術家。紀
の人。名は算長。津田流砲術の祖。種子島で砲術
学び堺の鍛冶辻・清右衛門に銃砲の製作を教え
とともに津田流を開いた。永祿一〇年（一五六七）
没。
つだすけなお【津田助直】江戸前期の刀工。近江
の人。二代津田助広に学ぶ。作風は師風をよく伝

承した瀧瀬(とうらん)刃である。寛永一六年(六三九)生。

つだすけひろ【津田助広】江戸前期の刀工。〇〇(播磨)の人。大坂に出て初代河内守国助の門学ぶ。「そほろ」と添銘のある作品があると云ふ。

「そぼろ助監」という。一説に明暦元年（一六五）没と伝える。③二代）摂津の人。通称、ササキ。之丞。初代の養子。初代没後越前守を受領。講道館（とうどうかん）という独特の刃方を創始して一世を馳した。寛永二四（一六四七）—二六三七（一八二〇）
【津田仙】農学者。千葉県出身。毎子

父。渡米して西洋農法を学び、帰国後、リンゴの栽培、人工交配法などの西洋式農法の普及に努めた。明治八年（一八七五）には農學社を設立。天保八
明治四一年（一八三七—一九〇八）
つだーそうち「津田左右吉」歴史學者。岐阜県
身。早稲田大學教授。日本の國民思想史を實証
義的に研究した。古代史に関する論考が國体思

に反するとされ、昭和十五年（一九四〇）不敬罪問われた。著に「古事記及び日本書紀の研究」など。明治六〇昭和三十六年（一八七三—一九六一）
つだそうきゅう【津田宗及】安土桃山時代の茶人堺の会合衆の一人。宗達の後男。屋号を天王寺

といふ。利休とともに、織田信長、豊臣秀吉に
て、御茶頭おさどうををつとめた。著「津田宗及
湯日記」。天正一九年（一五九一）没。
つだーそうたつ「津田宗達」室町末期の茶人。堺
豪商天王寺屋宗柏の長男。宗及の父。武野紹鷗
茶を学ぶ。名物茶器三〇種を所持した。永正元
永祿九年（一五〇四―六六）

つだーまさみち【津田真道】明治初期の官吏、法学者。名を「しんどう」とも「まみち」とも。岡山県出身。西周とオランダに留学、帰国後、開成所教授。

身。西周とオランダに留学、帰国後、開成所教授。

明治元年（一八六八）「泰西国法論」を刊行、明治政府の法律の整備に貢献した。明六社に参加、東京学士院会員、貴族院議員。文政一二～明治三十六年（一八二九～一九〇三）

つたい、つひ【**伝**】**名**（動詞「つたう（伝）」の連用形の
名詞化）①船全体またはその一部の反りぐあいを
いう船大工の語。＊新造御船木寄寸尺取調根帳「棟の
伝ひ并帆棟の伝ひを以日覆立、兩立の高さ恰好能、真
向丈明け」②屋根つたいに忍び込むこと、また、

その者をいう。盗人仲間の隠語。(隠語輯覧)
 つたい　　つたひ(伝)(語素)(動詞)つたう(伝)の連用形
 から)地形・建造物などを示す名詞について、それを
 伝わって行くことを表わす。「峰づたい」「浜づたい
 ・島づたい」「軒づたい」など。
 つたたい・ありき　　つたひ・(伝歩)「名」つたいあるき(伝
 歩)に同じ。妻木(松瀬)青々冬「あか棚をつたひあ
 りきや鶴鶴」

つたいあるき つたひ：【伝歩】名 ある物をつたわつて、それに沿つて歩くこと。また、とびとびになつてゐるものを踏んで歩くこと。つたいありき。○微徳田秋声「四」「お銀は障子を伝歩行（ツタヒアルキ）してゐる子供の様子を目を配りながら」○発音（繪字）

つたないかくつたひ^一掛^二百力下^三（かくは他
とつなかりをもつ意）手づるを求めて近づく。
＊歌舞伎韓人漢文手管始（唐人殺し）「おいちが毎
晩此様に廊へ通ふも、銘々思惑が有て、つたひかけて
も七里けんばい」

(「伝符」)に同じ。
つたひつたい、つたひつたひ(「伝」「名」(形動))ある物を
つたわって移動すること。また、そのさま。*海人刈
薬物語二かくれの方の戸のあきたるをうれしく
て、入り給ひて、御丁のうしろの方より入りて、つた
ひつたひにさぐり寄り給へば)
つたひのしるし　つたひ：〔伝符〕〔名〕令制で、官人が、

伝馬を使って旅行することを許可する証。つたいるし。つたわりのしるし。↓伝符(でんぷ)。*書紀大化二年正月(北野本訓)「凡そ駅馬伝馬を給ふことは、皆鈴伝符(つたひノシルシ)の刻(きざみ)の数に依れ」*書紀「天武元年七月(北野本訓)「即ち將軍吹

進らるむ」
て官櫓(かき・駅鈴(すず)・伝印(ツタヒノシジシ)を
負、難波の小郡に留りて以西の諸の国の司等に仰せ
つたいばしつたひ：〔伝橋〕〔名〕つたい道にある橋。
それをつたわつて渡つてゆく橋。隣女和歌集四
「山河のいとはかしはのつたひはしふみも定めぬと
を渡る哉」

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名) 泥酔している者を

いう、盗人仲間、隠語。「特殊語構成様式并其語集」

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名) つたえろ行く険し

い道。東関紀行興津より車返、津津風はげしきに

打寄する波もみななれば、急ぐ潮干の伝ひ道、か

ひなき心地して。・咄本・醒睡笑「峰高う岸けはし

く、つづら折りなるつたえろ」(名詞)「つたえ

ろ」(名詞)「つたえろ」(名詞)「つたえろ」

と用語源)ある物から離れないようにして、その

物に沿って移動する。④点在するものに従って次々

と移動する。つたえろ。・万葉一〇・一八二六「春さ

れば妻を求むと驚の木末(こぬれ)を伝つたひ」鳴

きつともな作者未詳」・風雅秋中・五九三「絶

え絶えの雲間につたえろ影にこそ行くとも見ゆれ秋

の夜の月平宗宣」・徒然草一六六「大砌(みぎり)の

石をつたひて雪に跡をつげず」・夜明け前・島崎藤

村「第一部下・一・三」岩の間をつたたりして、漸

く峠を越えることが出来た」④連続するものに従っ

て沿って移動する。物について動く。つたえろ。・古

事記一・中・歌謡「浜つ千鳥 浜よは行かず 磯豆多布ツ

タフ」・法華経玄賛淳祐点「木に縁(ツタ)と危厳と

高木とに果(すま)ふ」・源氏・賢木「君はぬりこめの

戸の細めにあきたるを、やを押しあげて御屏風の

はざまにつたひ入り給ひぬ」・今昔一九・三五「猿は

木に伝ひて失せにけり」・海道記・逆川より鎌倉・嶮

き岩の重りふせる迫(はざま)をつたひ行けば」・虞

らみ(岩絶)。岡山県吉田郡731 (名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

の名詞化) 伝えること。また、その伝える内容や伝

える人。①ことごと。伝言。たより。音信。・万葉一

一〇・二〇〇八「ぬば玉の夜霧に隠り遠くとも妹が伝

つたへ」は早く告げこそへ麻呂歌集」・源氏・手習

「このおまへなる人姉の君のつたへ、あやしくて

うせたる人とは聞きおきたれば、それにやあらんと

は思けれど、さだめなきこと也」・浮世草子・好色五

人女一三・二「おほしめしよりおもひもよらぬ御つ

たへ、此(この)方も若ひもの事なれば、いやでもあ

らず候へども」②言い伝え。伝説。伝承。また、

伝記。・源氏・横笛「夜かたらずとか女房のつたへに

いふなり」・談義本・風流志道軒伝説・友人風来子こ

れが伝作して遠く寄せらる」③学問・技芸を授ける

こと。また、その学問・技芸。教え。伝授。・宇津保楼

上下「今よりしか教へ奉りたらんこそ、いと二なきつ

たへならめ」・源氏・明石「嵯峨の御つたへにて、女五

の宮さる世のなかの上手にもし給けるを」・今鏡一

五・師太刀「今は師のつたへも絶えにたるにこそ持な

れ」・浮世草子・新可笑記一四・二「我もつたへなき哥

道の縁にひかれて伊勢小町を見る事なれば」・読本・

春雨物語目ひとつの神「何の芸はおのが家の伝へ

あり」・源氏・蝴蝶「内のおほい殿の中將の、このさぶら

ふみる子をぞ、もとより見知り給へりける、つたへ

にて侍りける」(名詞)「つたえろ」の語源説。(名詞)

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

つたえろ—つたえろ「伝坊」(名詞)「つたえろ」の連用形

おいて用いる場合。④物を受けつぐ。ひきつぐ。・地

蔵十輪経元慶七年点「後賢燈を既夕に伝(ツタ)へ

ヨ」・源氏・松風「身づから領らう」するとところに侍

らねど、また知りつたへ給ふ人もなければ、かごかな

るならひにてしごころかくろへ侍りつるなり」・方

丈記「わが身、父方の祖母の家をつたへて、久しくか

の所に住む」・大観本・謡曲・小鍛冶「伝ふ家の宗近

よ、心安くも思ひて下向し給へ」④人づてに聞く。う

わきに聞く。・蜻蛉一・中安和三年「また同じことを

ものしたれば、つたへて聞くらむに」・源氏・鈴虫

「おのづから人の口さなくなつたへきこしめしける

のちいと悲しういみじくて」・今鏡五・師太刀「賀

王恩といふ衆ぞ弾き給けるとつたへ承る」④学問や

技芸を授けてもらう。教わる。伝授を受ける。・源

氏・若菜下「この御琴の音(むね)ばかりだにつたへたる

人をささあらじとのたまへば」・今昔七・一三「曇

摩伽陀耶舎に値(あひ)て无量義経を伝へむと思ふ」

・徒然草一五三「かかるとは文にも見えず、伝たる教

へもなしといへば」②渡りしやる方に重点をおいて

用いる場合。④手渡す。ゆずりわたす。・竹取「壺の

薬をへて頭中將呼びよせて奉らす。中將に天人取て

つたふ」・落窪三「是、翁のいとしき物と思ふ給へ

て、誰かつたへ置かんと年比かくしおきて」・源

氏・梅枝「宰相中將取つたへまゐらせ給ふ」・古

事談四・將門伏誅事・兼賜・功田「永伝三子孫」④後

代まで順送り言い知らせる。語りつぐ。言い残す。

つたまさき【葛根】名 植物 つるまさき(蔓根)の異名。重訂本草綱目啓蒙「一四下・扶芳藤 まさきのから つるまさき つたまさき 和州」(開園鑑蔵④)

つたみ【現吐】名 (つ)は「乳」の変化したものの。「たみ」はくこと。乳児がいったん飲んだ乳を吐くこと。乳をあますこと。十巻本和名抄「現吐 病源論云現吐八上音見 豆太美ノ小兒由哺乳冷熱不調所致也」・源氏横笛 此君 いたくなき給て、つたみなどし給へは、めのともおきさき」・女中言葉「つたみ乳あます事」二十五絃・薄田泣菫・雷神の歌「吐乳(ツダミ)もすると見る程に」(開園鑑蔵④)

つたむ【動】因長い物を短く切る。長野県下伊那郡「この木をつたんでたきにする」(44 岐阜県 愛知県宝飯郡「わらをつたむ」59)

つたむすび【葛結】名 紐の結び方の一つ。結び上がりをもの葉の形に似せたもの。(開園鑑蔵④)

つたもみじ【もみじ】名 ①葛の葉の色づいたもの。紅葉した葛の葉。季・秋。・為家集「上宿からにかきほしたのむつた紅葉またあらはれて秋風を吹く」・俳諧 六百番俳諧発句合「四三番」なま壁や秋をわする葛紅葉「言水」・俳諧 韻塞 棧や命をからむ葛もみぢ芭蕉」②植物「いたやかえて板屋櫓」の異名。(開園鑑蔵④)

つたもみじつとつとやとつげ つたもみじつとつとやとつげ【葛紅葉】名 歌舞伎脚本。世話物。五幕。河竹黙阿彌作。通称「文彌殺し」。安政三年(一八五〇)江戸市村座初演。金原孝馬生の人情斬による。座頭文彌は、幼時、姉お菊のあやまちで言となったが、姉が吉原へ身を売って調(と)のえた一〇〇両の金で、市名いちむしを取りに京都へ向かう途中、主家のための金の調達に苦しんでいた伊丹屋重兵衛に、宇都谷峠で殺される。その怨念が重兵衛の妻にとりつき、重兵衛を苦しめる。(開園鑑蔵④)

つたもみじつとつとやとつげ【葛紅葉】名 歌舞伎脚本。世話物。五幕。河竹黙阿彌作。通称「文彌殺し」。安政三年(一八五〇)江戸市村座初演。金原孝馬生の人情斬による。座頭文彌は、幼時、姉お菊のあやまちで言となったが、姉が吉原へ身を売って調(と)のえた一〇〇両の金で、市名いちむしを取りに京都へ向かう途中、主家のための金の調達に苦しんでいた伊丹屋重兵衛に、宇都谷峠で殺される。その怨念が重兵衛の妻にとりつき、重兵衛を苦しめる。(開園鑑蔵④)

つたもみじつとつとやとつげ【葛紅葉】名 歌舞伎脚本。世話物。五幕。河竹黙阿彌作。通称「文彌殺し」。安政三年(一八五〇)江戸市村座初演。金原孝馬生の人情斬による。座頭文彌は、幼時、姉お菊のあやまちで言となったが、姉が吉原へ身を売って調(と)のえた一〇〇両の金で、市名いちむしを取りに京都へ向かう途中、主家のための金の調達に苦しんでいた伊丹屋重兵衛に、宇都谷峠で殺される。その怨念が重兵衛の妻にとりつき、重兵衛を苦しめる。(開園鑑蔵④)

つたや【鳥屋】江戸時代の地本問屋。はじり吉原大門口にあったが、天明(一七八一)一八九の頃、日本橋油町に移転。屋号は富士山の下に葛の葉。通称、葛重(つたじゅう)。(つたじゅう)

つたやじゅうざぶらう【葛屋重三郎】江戸中期の地本問屋。葛屋の主人。本名北川理。通称、葛重(つたじゅう)。狂名、葛唐丸(つたのから

まる)。蜀山人、京伝らと親交があり、洒落本・黄表紙などを次々と出版。また、写楽・歌麿らの浮世絵版画の版元として、天明寛政期(一七八一—一八〇〇)の江戸文化に指導的役割を果たした。寛延三(一八五〇)九年(一七五〇—一九七) (開園鑑蔵④)

つたやまがし【葛山節】名 元禄・宝永(一六八八—一七一)の頃、上方の俳優葛山四郎兵衛が舞台でうたい流行した小唄。 (開園鑑蔵④)

つたや【伝】他ヤ二 (ハ行下二段活用)の「つたふ(伝)から転じて、室町時代頃から用いられた語。多くの場合、終止形は「つたゆる」の形をとる。「つたえる(伝)」に同じ。・ロドリゲス日本大文典「センリヤウノキガネヲウルトモコレヲ tsutanuoto(ツタルコト)ナカレ」・歌舞伎・傾城王昭君「二、中より大福帳を取り出し、八王に相伝ゆる」(開園鑑蔵④)

つたよう【つたよ】名 ①「自ハ四」はたよりした目的もたよりあちこち動く。さまよふ。たどる。・書紀「垂仁二年一月(熱田本訓「道路を知らずして嶋」しまし)浦うらうらに留連(ツタヨヒ)つ。北海より廻り出雲国を経(て)此(こ)の間に至れり」・能因本枕「九一職の御曹司におはします頃、西の廂にて「あれかはしたなくて雪の山までかりつたよひけんこそ」とかなしけれ」・散木奇歌集「難上わぶる山世にふる道をふみたがへまどつたよふ身をいかせん(増俊卿)」(開園鑑蔵④)

つたより【津田流】名 砲術の一派。紀伊国那賀郡小倉の津田監物算長が、享祿年間(一五二八—一三三)種子島に漂着し、ポルトガル人ペイトルウィスに砲術を学んで天文年間(一五三二—一五五)に帰国して創始したもの。・武芸流祖録「砲術・津田流・津田監物。紀州那賀郡小倉の人也。好砲術。到種子島。究奥旨。一天文辰年十五日。婦紀州。凡在島十余年。其子自由齋三其術を給こと。是皆鈴・伝符(ツタハリシルシ)の刻きさみの数に依る」

つたわりの【つたはり】名 (動詞)つたわ(伝)の連用形の名詞化。伝わること。伝来。所伝。多くつたわりのの形で連体修飾に用いる。・今昔三・四「二の所の伝はりの物にて広高が書たる屏風の絵有り」・波形本狂言宗論「是此じゆすは高祖日蓮上人よりつたわりのおじゆずじや、ちといただいてこちの宗旨にならしませ」(開園鑑蔵④)

つたわりの【つたはり】名 (動詞)つたわ(伝)の連用形の名詞化。伝わること。伝来。所伝。多くつたわりのの形で連体修飾に用いる。・今昔三・四「二の所の伝はりの物にて広高が書たる屏風の絵有り」・波形本狂言宗論「是此じゆすは高祖日蓮上人よりつたわりのおじゆずじや、ちといただいてこちの宗旨にならしませ」(開園鑑蔵④)

つたわりの【つたはり】名 (動詞)つたわ(伝)の連用形の名詞化。伝わること。伝来。所伝。多くつたわりのの形で連体修飾に用いる。・今昔三・四「二の所の伝はりの物にて広高が書たる屏風の絵有り」・波形本狂言宗論「是此じゆすは高祖日蓮上人よりつたわりのおじゆずじや、ちといただいてこちの宗旨にならしませ」(開園鑑蔵④)

つたわりの【つたはり】名 (動詞)つたわ(伝)の連用形の名詞化。伝わること。伝来。所伝。多くつたわりのの形で連体修飾に用いる。・今昔三・四「二の所の伝はりの物にて広高が書たる屏風の絵有り」・波形本狂言宗論「是此じゆすは高祖日蓮上人よりつたわりのおじゆずじや、ちといただいてこちの宗旨にならしませ」(開園鑑蔵④)

「玄象(ぐんじやう)と云ふ琵琶俄に失にけり。此は世の伝はり物にて、極いみじき公財(おはやけたから)にて有るを」

つたわ【つたは】名 (自ラ五(四)) ①他の場所や後の代に伝えられる。②物が次の代へと譲り渡されて保存される。受けつがれ引きつがれて残る。・宇津保忠こそ五つぎ六つぎとつたはれる帯を、かくわが代にもし失なひつたこと」・源氏・給合、院の御絵は、ききしみの宮よりつたはりて、あの女御の御方にも多く参るべし」・徒然草「九十九の唐櫃は上古より伝てその始めを知らず、数百年を経たり」・風雅・神祇二二三「天照らず御影をうつすす鏡つたはれる代の曇りあらめや藤原公藤」③次から次へと話つがれる。後々まで語りつがれる。また、広く世間に言い知らされる。・古今・仮名序「このうた、あめつちのひらけはじまりける時より、いできにけり。略しかあれども、世につたはれることば」・大唐西域記卷十二平安中期点、其の霊は已に隠れて、其の教は猶伝(ツタハレ)り」・源氏若菜下「女楽にえことまぜでなむ逃げにけるつたはらむ名こそをよけれ」

・古本説話集「二六・長能ながたふは、かげろふの日記したる人のせうと、つたはりたる歌よみ」(知識、技術、風俗文化などが他の地域に移る。伝来する。・大唐三蔵玄奘法師啓平安初期点、香城を中洲に建て、玄津を神界に引け、像教東に被(ツタハル)を、斯れを盛なりと為す」・源氏・橋姫「しか御耳とまるばかりの手などは、いづくよりかこてまてはつたはりこむ。あるまじき御ことなり。こて、琴(きむ)かきならし給へる」・青年・森岡外七「それが日本に伝(ツタ)はって来て、又ずっと小さいイブセンになりました」②何かを手がかりにして一方から他方に移る。また、ものに沿って移動する。「熱がつたわる」・「氣持がつたわる」・源氏・橋姫「そのかみむつまじう思ふ給へし同じ程の人多く失せ侍りにける世の末に、遙かなる世界よりつたはりまうて来て、この五年六年のほどなむこれにかくさぶらひ侍る」・浮雲・二葉亭四迷「一・「高い男は縁側を伝(ツタ)はって参り、突当りの段梯子を登って二階へ上る」・いさなとり幸田露伴「二四子の刻の鐘は、露に重る緑葉の梢伝はり涼さと共に入り来る南窓のほとり」③代々続く。ひきつづく。・源氏・松風「かのときよりつたはりて宿守(やどもり)のやうにである人と呼びとりてかたらふ」・私聚百因縁集「八・三・抑そをも僧賀上人は淡海公平等より流(ツタハ)つて、敏行に孫子、從三位恒衡宰相の男子なり」(開園鑑蔵④)

・古本説話集「二六・長能ながたふは、かげろふの日記したる人のせうと、つたはりたる歌よみ」(知識、技術、風俗文化などが他の地域に移る。伝来する。・大唐三蔵玄奘法師啓平安初期点、香城を中洲に建て、玄津を神界に引け、像教東に被(ツタハル)を、斯れを盛なりと為す」・源氏・橋姫「しか御耳とまるばかりの手などは、いづくよりかこてまてはつたはりこむ。あるまじき御ことなり。こて、琴(きむ)かきならし給へる」・青年・森岡外七「それが日本に伝(ツタ)はって来て、又ずっと小さいイブセンになりました」②何かを手がかりにして一方から他方に移る。また、ものに沿って移動する。「熱がつたわる」・「氣持がつたわる」・源氏・橋姫「そのかみむつまじう思ふ給へし同じ程の人多く失せ侍りにける世の末に、遙かなる世界よりつたはりまうて来て、この五年六年のほどなむこれにかくさぶらひ侍る」・浮雲・二葉亭四迷「一・「高い男は縁側を伝(ツタ)はって参り、突当りの段梯子を登って二階へ上る」・いさなとり幸田露伴「二四子の刻の鐘は、露に重る緑葉の梢伝はり涼さと共に入り来る南窓のほとり」③代々続く。ひきつづく。・源氏・松風「かのときよりつたはりて宿守(やどもり)のやうにである人と呼びとりてかたらふ」・私聚百因縁集「八・三・抑そをも僧賀上人は淡海公平等より流(ツタハ)つて、敏行に孫子、從三位恒衡宰相の男子なり」(開園鑑蔵④)

・古本説話集「二六・長能ながたふは、かげろふの日記したる人のせうと、つたはりたる歌よみ」(知識、技術、風俗文化などが他の地域に移る。伝来する。・大唐三蔵玄奘法師啓平安初期点、香城を中洲に建て、玄津を神界に引け、像教東に被(ツタハル)を、斯れを盛なりと為す」・源氏・橋姫「しか御耳とまるばかりの手などは、いづくよりかこてまてはつたはりこむ。あるまじき御ことなり。こて、琴(きむ)かきならし給へる」・青年・森岡外七「それが日本に伝(ツタ)はって来て、又ずっと小さいイブセンになりました」②何かを手がかりにして一方から他方に移る。また、ものに沿って移動する。「熱がつたわる」・「氣持がつたわる」・源氏・橋姫「そのかみむつまじう思ふ給へし同じ程の人多く失せ侍りにける世の末に、遙かなる世界よりつたはりまうて来て、この五年六年のほどなむこれにかくさぶらひ侍る」・浮雲・二葉亭四迷「一・「高い男は縁側を伝(ツタ)はって参り、突当りの段梯子を登って二階へ上る」・いさなとり幸田露伴「二四子の刻の鐘は、露に重る緑葉の梢伝はり涼さと共に入り来る南窓のほとり」③代々続く。ひきつづく。・源氏・松風「かのときよりつたはりて宿守(やどもり)のやうにである人と呼びとりてかたらふ」・私聚百因縁集「八・三・抑そをも僧賀上人は淡海公平等より流(ツタハ)つて、敏行に孫子、從三位恒衡宰相の男子なり」(開園鑑蔵④)

・古本説話集「二六・長能ながたふは、かげろふの日記したる人のせうと、つたはりたる歌よみ」(知識、技術、風俗文化などが他の地域に移る。伝来する。・大唐三蔵玄奘法師啓平安初期点、香城を中洲に建て、玄津を神界に引け、像教東に被(ツタハル)を、斯れを盛なりと為す」・源氏・橋姫「しか御耳とまるばかりの手などは、いづくよりかこてまてはつたはりこむ。あるまじき御ことなり。こて、琴(きむ)かきならし給へる」・青年・森岡外七「それが日本に伝(ツタ)はって来て、又ずっと小さいイブセンになりました」②何かを手がかりにして一方から他方に移る。また、ものに沿って移動する。「熱がつたわる」・「氣持がつたわる」・源氏・橋姫「そのかみむつまじう思ふ給へし同じ程の人多く失せ侍りにける世の末に、遙かなる世界よりつたはりまうて来て、この五年六年のほどなむこれにかくさぶらひ侍る」・浮雲・二葉亭四迷「一・「高い男は縁側を伝(ツタ)はって参り、突当りの段梯子を登って二階へ上る」・いさなとり幸田露伴「二四子の刻の鐘は、露に重る緑葉の梢伝はり涼さと共に入り来る南窓のほとり」③代々続く。ひきつづく。・源氏・松風「かのときよりつたはりて宿守(やどもり)のやうにである人と呼びとりてかたらふ」・私聚百因縁集「八・三・抑そをも僧賀上人は淡海公平等より流(ツタハ)つて、敏行に孫子、從三位恒衡宰相の男子なり」(開園鑑蔵④)

・古本説話集「二六・長能ながたふは、かげろふの日記したる人のせうと、つたはりたる歌よみ」(知識、技術、風俗文化などが他の地域に移る。伝来する。・大唐三蔵玄奘法師啓平安初期点、香城を中洲に建て、玄津を神界に引け、像教東に被(ツタハル)を、斯れを盛なりと為す」・源氏・橋姫「しか御耳とまるばかりの手などは、いづくよりかこてまてはつたはりこむ。あるまじき御ことなり。こて、琴(きむ)かきならし給へる」・青年・森岡外七「それが日本に伝(ツタ)はって来て、又ずっと小さいイブセンになりました」②何かを手がかりにして一方から他方に移る。また、ものに沿って移動する。「熱がつたわる」・「氣持がつたわる」・源氏・橋姫「そのかみむつまじう思ふ給へし同じ程の人多く失せ侍りにける世の末に、遙かなる世界よりつたはりまうて来て、この五年六年のほどなむこれにかくさぶらひ侍る」・浮雲・二葉亭四迷「一・「高い男は縁側を伝(ツタ)はって参り、突当りの段梯子を登って二階へ上る」・いさなとり幸田露伴「二四子の刻の鐘は、露に重る緑葉の梢伝はり涼さと共に入り来る南窓のほとり」③代々続く。ひきつづく。・源氏・松風「かのときよりつたはりて宿守(やどもり)のやうにである人と呼びとりてかたらふ」・私聚百因縁集「八・三・抑そをも僧賀上人は淡海公平等より流(ツタハ)つて、敏行に孫子、從三位恒衡宰相の男子なり」(開園鑑蔵④)

・古本説話集「二六・長能ながたふは、かげろふの日記したる人のせうと、つたはりたる歌よみ」(知識、技術、風俗文化などが他の地域に移る。伝来する。・大唐三蔵玄奘法師啓平安初期点、香城を中洲に建て、玄津を神界に引け、像教東に被(ツタハル)を、斯れを盛なりと為す」・源氏・橋姫「しか御耳とまるばかりの手などは、いづくよりかこてまてはつたはりこむ。あるまじき御ことなり。こて、琴(きむ)かきならし給へる」・青年・森岡外七「それが日本に伝(ツタ)はって来て、又ずっと小さいイブセンになりました」②何かを手がかりにして一方から他方に移る。また、ものに沿って移動する。「熱がつたわる」・「氣持がつたわる」・源氏・橋姫「そのかみむつまじう思ふ給へし同じ程の人多く失せ侍りにける世の末に、遙かなる世界よりつたはりまうて来て、この五年六年のほどなむこれにかくさぶらひ侍る」・浮雲・二葉亭四迷「一・「高い男は縁側を伝(ツタ)はって参り、突当りの段梯子を登って二階へ上る」・いさなとり幸田露伴「二四子の刻の鐘は、露に重る緑葉の梢伝はり涼さと共に入り来る南窓のほとり」③代々続く。ひきつづく。・源氏・松風「かのときよりつたはりて宿守(やどもり)のやうにである人と呼びとりてかたらふ」・私聚百因縁集「八・三・抑そをも僧賀上人は淡海公平等より流(ツタハ)つて、敏行に孫子、從三位恒衡宰相の男子なり」(開園鑑蔵④)

・古本説話集「二六・長能ながたふは、かげろふの日記したる人のせうと、つたはりたる歌よみ」(知識、技術、風俗文化などが他の地域に移る。伝来する。・大唐三蔵玄奘法師啓平安初期点、香城を中洲に建て、玄津を神界に引け、像教東に被(ツタハル)を、斯れを盛なりと為す」・源氏・橋姫「しか御耳とまるばかりの手などは、いづくよりかこてまてはつたはりこむ。あるまじき御ことなり。こて、琴(きむ)かきならし給へる」・青年・森岡外七「それが日本に伝(ツタ)はって来て、又ずっと小さいイブセンになりました」②何かを手がかりにして一方から他方に移る。また、ものに沿って移動する。「熱がつたわる」・「氣持がつたわる」・源氏・橋姫「そのかみむつまじう思ふ給へし同じ程の人多く失せ侍りにける世の末に、遙かなる世界よりつたはりまうて来て、この五年六年のほどなむこれにかくさぶらひ侍る」・浮雲・二葉亭四迷「一・「高い男は縁側を伝(ツタ)はって参り、突当りの段梯子を登って二階へ上る」・いさなとり幸田露伴「二四子の刻の鐘は、露に重る緑葉の梢伝はり涼さと共に入り来る南窓のほとり」③代々続く。ひきつづく。・源氏・松風「かのときよりつたはりて宿守(やどもり)のやうにである人と呼びとりてかたらふ」・私聚百因縁集「八・三・抑そをも僧賀上人は淡海公平等より流(ツタハ)つて、敏行に孫子、從三位恒衡宰相の男子なり」(開園鑑蔵④)

家の谷にある墓の豪華な遺物で有名。(開園鑑蔵④)

つち【土・地】名 ①地球の外殻、特に陸地。また、その表面。大地。地上。地面。・天(あめ)。・書紀「推古八年二月(國書寮本訓「天上(あめ)に神有します。地(ツチ)に天皇有します」・万葉一五八〇〇「天へ行かば、汝がまにまに都智(ツチ)ならば、大君います(山上憶良)」・竹取「大空より人、雲に乗りて下り来て、つちより五尺ばかり上りたる程に、立ち列ねたり」・古本説話集六五「ゆるぎゆるぎして、つちより一尺ばかりゆるぎあがるほどに」②①を形成している岩石などが細かい粉末状となったもの。岩石・鉱物と区別している。・古事記「土、無き八尋殿を作り、其の殿の内に入て、土(ツチ)を以て塗り塞ぎて」・宇津保・藤原の君「すべてほとけと申もの、つちをまろがしてこれを伝といはば、御みあかしたてまつり」・談義本・風流志道軒伝「吹き来る風もいと寒く道の辺はいてかへりて、土とも石ともわきがたきに」③①から転じて、道路。・枕三九・節は五月にしく月はなし「つちありくわらははななどの、ほどほどにつくは、いみじきわざしらと思ひて」④①から転じて、地上の世界。現実の世界。現世。俗界。・堤中納言「よしなしことてんちくの山にはとりのみねのいはやにまれ、こもり侍らむ。それもなほつち近し」・こんでむつむん地「一・三・きりしとをもとめ奉るために、みなつちの事をふんとのこととおもふものは、まことにかしこき人なり」⑤地上のある特定の場所。限られた地域。地(ち)。・談義本・風流志道軒伝「汝が修行成就して、再び此土へ帰りし時」⑥階段。さざはし。・石山寺本金剛般若集驗記平安初期点「階(ツチ)を上りて来りて堂の内に入りて」⑦価値のないもの、容貌の醜いこと。たとえ。・源氏・蜻蛉「こちよき人を見集むれど、似るべくもあらざりけりと覚ゆ。御前なる人はまことにつちなどの心ちするを」・狭衣物語「一・よしとみしかど、それは、つちなりけりつちなりけり」⑧あかぬけていないこと。また、そのもの。いなか。いなか者。・浄瑠璃・恋女房染分手綱「一・きつ土(ツチ)ツチ(じや)ぞへ」・雑俳・友千鳥けふの客皆んな土(じ)と醬油(じ)さす」・浮世草子・三千世界色修業「三・「御当地の遊所ははじめてのふつつかな閑東もの、万事さしづをたのみますとふるひ声して土らしくひければ」・洒落本・風流探人形下「いなかのきやくていなか。略(りやく)つちのくせにせりふつて、いけたしるものじやない」・新撰大阪詞大全「つちとはみなか人のこと」⑨(じ)げ(地)の地(ち)の訓読みか。清涼殿殿上の間に昇殿する資格を認められていないもの。地下(じげ)。・落窪「一・六位といへど、蔵人とにだにあらず、つちの帯刀の、歳二十ばかり、長は一寸ばかりなり」⑩摂津国名塩村で産した鳥の子紙の一種。泥土を混ぜるため厚くて重く、裂け

のと袴が明かぬ。そこでわがみに槌(ツチ)打たさふと思ふて時々用無心」

つち《名》[方言]魚。①鱒(ぶり)の五寸ぐらゐのもの。愛媛県温泉水郡神和044 ②鱒の一尺ぐらゐのもの。広島県賀茂郡760

つち《名》[方言]物置のように使う天井裏。愛知県知多郡587 和歌山県682 福岡県浮羽郡900 熊本県南関947

つちーあきない、あきなき[土商]《名》江戸時代、川ざらいを請負い、その土砂を売買した商人。

つちーあけび[土通草]《名》ラン科の多年草。各地の湿った林下にまれに生え、高さ三〇―九〇センチメートル。横に這(は)う太い地下茎がある。全体に肉質で黄褐色を帯び、緑葉がない。茎は先で分枝し、卵形の鱗片葉をまばらに付ける。夏、径約二センチの黄褐色の花が枝先に付き、円錐花序になる。肉質で赤褐色の果実はアケビに形が似て序垂れ下がる。種子に翼がある。漢方では果実を土通草(どとうそう)といひ、強壯、強精薬にする。やまとうがらし。やまのかみのしゃくじょう。書言字考節用集六、列当ツチアケビ。草蓀荇同。*物品識名「やまとうがらし」土アケビ。山珊瑚。*日本植物名彙編松村任三ツチアケビ。山珊瑚。[発音]金のツギアキビ(岩手)ツツアクベ[青森]ツツアグベ[津軽語彙] ㊦ [国語]な物の

つちあそび[土遊]《名》土をこねていろいろな物の形を作ったり、土を掘ったりして遊ぶこと。つちいじり。つちなぶり。*発心集一六、西行女子出家事「ありし土遊(ツチアソビ)の時、きと見しにあらぬ物に生ひまさりて」*聞書集「我もさぞにはのいさこのつちあそびさて生ひたてるみにこそありけれ」[発音]㊦ ㊦

㊦ ㊦

つちあな[土穴]《名》土の中に掘った穴。*幸若・文覚「二丈五尺につちあなをはつて文覚をおとし上、上にもつちをはねおひ」*和玉篇「塚クボミツチアナ」*鳥影「石川啄木六・二「此室の暗さは土窟(ツチアナ)にでも入った様で」」[発音]㊦ ㊦ [吉備和玉]

つちあぶら[土油]《名》石油(せきゆ)。つちのあぶら。*改正増補和英語林集成「Tsuchiabura ツチアブラ 地油」

つちいゝ[土居]《名》柱や家を建てるための土台。帳台の四隅にあつて柱を立てる木の台や、几帳の柱を立てる木の台などをもいう。*宇津保一蔵開上「御帳のとのつちいに押しかかりて、あねぶりし給へり」*方丈記「仮りの庵もややるさとなりて、軒に朽ち葉深く、つちゐに苦むせり」*方丈記「つちゐを組み、うちおほひを聳きて、継目ごとにかがねを掛けたり」

つちいっちる[土井・土居] 姓氏の一つ。[発音]㊦ ㊦

つちいばんすい[土井晩翠] 詩人、英文学者。宮城県出身。本名林吉。晩年、みずから姓を「ど」と称した。東京帝大在学中「帝国文学」を編集、詩を発

表した。卒業後都文館の教師となり、第一詩集「天地有情」出版。明治三三年（一九〇〇）第二高等學校教授、二高を退いてからはホメロスの翻訳に従事。著に「曉鐘」など。明治四一昭和二七年（一八七二—一九五二）

つちいれきれ【土熱】《名》夏、強い日光に照りつけられて土が熱氣を発すること。また、その熱氣。●酒虫●芥川龍之介「麻でも黍でも、皆、土いきれにぐつたりと頭をさげて」〔関連語〕①

つちいげたつちる【土居朽】《名》建物の柱の下にある横木。どいげた。●正倉院文書「史館本七天平宝字五年二月二八日・矢口公吉人屋丈尺勘注解（大日本古文書四）土居朽六枚。二枚・別長二丈四尺、二枚・別三丈四尺、広一尺二寸」

つちいじり【ちり】《土弄》《名》①「つちあそび（土遊）」に同じ。●童謡「イタリヤの子へ水谷まさる」知らぬふりして土（ツチ）いぢり」②趣味として、園芸や畑作りなどをする。●家島崎藤村「下・八」草鞋穿で、土いぢりでもしながら、片手間に用務を談ずるなんて、左様いふ風の人ぢや有りません」●或る女●有島武郎「後二九」ある日倉地が例のやうに庭に出て土いぢりに精を出してゐる間に」〔関連語〕②③

つちいっき【土一揆】《名》室町中期、畿内を中心に、さかんに起こった農民、地侍の武装蜂起。年貢の減免や徳政を要求して、在園領主・守護大名や酒屋・土倉などの高利貸などと武力で争った。どいっき。●東寺百合文書を・寛正三年一月日・上久世庄名主沙汰人百姓等起請文案（大日本古文書六・三一五）「今度つち一きに同心張本仕候て、らんはうらうせき更にたさき候」●御湯殿上日記「文明一二年九月一二日」夜入てつちいっきのわぬさうきこゑて火ともみゆるる」〔関連語〕②

つちいなし【土桶子・土蝗】《名》バッタ科の昆虫。体長は羽の先を含めて三八・五〇ミリ弱。体は赤褐色で、白い細毛でおおわれる。東京以南に分布する。●大和本草北正一四「蟲彙略」土蝨つちいなしおほとびむし、土中にすむに非ず。土と色を同くす。雙羽は黄色なり」〔関連語〕ツチナゴ〔ある〕②

つちいみ【土忌】《名》陰陽道で、ある場所やある方角で穴掘・動土・造営などの土を犯す工事を忌むこと。土公（とく）方・八卦方・大將軍方・主相方などのさまざまな禁忌があり、またやむを得ず工事を行なう場合には家人がしばらく他に居を移す、いわゆる方違（かたがたがえ）を行なった。●浜松中納言「三」この大式つちいみに、旅所にありけるを」●更級日記「三月つちよりがた、つちいみに人のをもに渡りたるに、桜さかりにおもしろく、今まで散らぬもあり」

つちいも【土芋】《名》植物。さといも（里芋）の異名。●道へ石川啄木「土芋（ツチイモ）みたいにのつべりし

た真黒な細君で」〔因箇栃木・岐阜・滋賀・三重各県一部024 大阪府豊能郡74% 和歌山・大分・福岡各県一部024〕
つちいれ 〔土入〕《名》 鋤簾（じょれん、鋤（すき）などで土を農作物の株の上からふるいこむこと。麦などの生育時に行なう。〔因箇備後〕04〕
つちいろ 〔土色〕《名》 ①土の色。 ②（形動）土のようにな顏色。血の気のない色。恐怖の顔、また憔悴したさまに色。青黒い色。つちけり。・俳諧類 船集「津・土色といふは人の良の色わろき事也」・雑俳・両面鏡「土いろな顔で橋まで客送る」・青春・小栗風葉・夏・一六「見る見る顔は土色に変わって」〔因箇備之〕04 余之〕
つちいろもち 〔土色餅〕《名》 「ながもち（永餅）」に同じ。
つちいん 〔土〕〔徒弟院・度弟院〕《名》 主に禅宗で、師匠が自己の得度させた弟子を住持（じゅうじ）とさせる寺。あるいは「つちえん」と読む。・宝慶記「天下有四箇寺院、謂〔禪院・教院・律院・徒弟院〕」・円覺寺文書・文和三年九月二日、大小禪刹規式条条〔中世法制史料集二・追加法七〕04 於〔諸山徒弟院西堂者、不經兩寺前板一者、雖為西堂、可歸本職位一矣〕
つちうす 〔土白〕《名》 土で造った摺白（すりうす）。
 とうす。・俳諧 鶉衣拾遺・上・一八八・旅論「向ひの土白のうたはおさまりて、隣の女夫のいきかきを聞」・雑俳・太奢集・一五「土白挽・朝から水家明いて居る」
 044 〔因箇秋田県河辺郡14（つちするす）青森県南部地方〕
つちうち 〔槌打〕《名》 ①布織物を平らな木または石の台（砧）きぬたにのせて、槌で打ち、布に光沢や柔らかさを出すこと。また、それをする人。綿織物に用いられる仕上法で、現在は打布機で行なう。きぬた打ち。・日葡辞書「Tachivichi（ツチウチ）訳〔槌で打つ人〕。また、それをする人」。・浮世草子「好色万金丹」一四「油屋の槌打（ツチウチ）の娘、白のめきりのむすめ」・製油録「一番目に搾りたる方へ立もどり、槌打（ツチウチ）すれば、又一しきり油たる也」
 〔因箇備之〕04 団〕
つちうちら 〔土浦〕 茨城県南部の地名。霞ヶ浦の西端に臨む。上代から開発され、江戸時代は土屋氏九万五千石の城下町として発展。霞ヶ浦水運と陸上交通の要地であり、農産物の集散地としても栄えた。大正九年（一九二〇）、隣接地に海軍航空隊が置かれてから軍都としても発展した。昭和十五年（一九四〇）市制。・俳諧・陸奥衛・一五「土浦の花や手にとる筑波山」
 ・土へ長塚節 二「霞ヶ浦を汽船で土浦の町へ出た」
 〔因箇備之〕04 余之〕
つちうらじょう 〔土浦城〕 茨城県土浦市にあった城。平将門が砦（とりで）を築いた跡といわれ、永享年間（一四二九～一四四一）今泉氏が築城以後、富谷・

つちくもそうし つちくもサウシ「土蜘蛛草紙土蜘蛛草子」絵巻物。一巻。紙本着色。鎌倉末期の作。源頼光渡辺綱らの土蜘蛛退治を描いたもの。絵は土佐長隆。詞書(ことば)がききは兼好法師筆と伝えるが根拠がない。国立博物館蔵。〔図〕ツチグモソーシ

つちくも「土曇」名 春の季節風に砂塵が舞い上がり、曇ったように見えること。〔季〕春。〔図〕ツチグモリ

つちくら「土倉・窖」名 ①地下に穴を掘ってつくった倉。あなぐら。②十巻本和名抄「三・窖 四声字苑云窖ハ音教漢語抄云都知良ノ倉窖土中蔵穀也」③搬運集「窖ツチクラ」④土で塗った倉。土蔵。どそう。⑤易林本節用集「土蔵 ツチクラ 窖 同」⑥室町時代、質屋をいう。どそう。〔図〕ツチクラ

つちぐり「土栗」名 ①担子菌類チチベニタケ科のきのこ。広く世界に分布し、夏から秋にかけて、山野の路傍に発生する。子実体は黒褐色で、初め扁球形をし径約二センチ。熟すと厚い革質の外皮が六〜一二片に裂けて外側に反り返り肉皮を現わす。肉皮は球形で薄い袋状をし、頂端に胞子を出す孔がある。外皮の裂片は湿気を含み、外側に大きく開き、乾くと内側に強く巻き込み、この時裂片の先端が肉皮を圧して胞子の飛散を行なう。また、巻いて丸くなった子実体は、風でころがることもある。つちがき。つちがきたけ。まだだんご。重訂本草綱目啓蒙「七・雜草・馬勃略」一種きつねのちやふくろと呼者あり。一名つちがきつちぐりやまがき阿州、ちがき土州、つちぐりのをば大和、めつぎし江州」②バラ科の多年草。西日本の山地や原野にみられる。高さ一五〜三〇センチ。全体に白い綿毛を密布。茎は地をはう。根葉は五〜九個の小葉からなる羽状複葉、茎葉は三出複葉。小葉は卵状長楕円形で長さ二〜五センチ。縁に粗い鋸歯(き)がある。春・夏・秋一五センチの黄色い五弁花を集散花序につける。根は太く食用になり、クリのような味がする。漢名、翻白草。つちな。ぶくりようそう。物品識名「ツチグリ 翻白草」・日本植物名集「松村任三「ツチグリ プクリヤウサウ 雞腿児」 〔図〕ツチグリ

つちくも「土車」名 土を載せて運ぶ二輪車。現代の大八車の祖型。車屋本語曲「土車」すまで世に経る土車、めぐるや雨のうき雲」・花伝髓記十六輪「下・脇は僧、つれ二三人もよし、車は土車にのる」能楽の曲名。四番目物。観世・喜多流。世阿彌作。深草少将は妻に死別した悲しみのあまり一子を見捨てて出家する。家臣小次郎は幼君を土車に乗せて諸国を尋ね歩き、ついに心も乱れて善光寺に至るが、

ここで父子はめでたく再会する。男物狂物おとこのぐるいもの。〔図〕ツチグルマ

つちくら「槌車」名 紋所の名。車の幅(や)の先輪の外側のところに槌をつけた形を圖案化したもの。うもれ木「樋口一葉」一〇「源氏車槌車ツチグルでばたん唐草菊が草、吉野龍田の紅葉に花に、彼れも美なり是も美なり」〔図〕ツチグルマ

つちくれ「土塊・塊」名 (つちくれとも) ①土のかたまり。ひとかたまりの土。また、土塊(どじょう)。書紀継体二年二月(前田本訓)「天下清(す)み泰(ゆたか)にして内外に虞(う)へ無シ。土塊(ツチクレ)膏腴(こうう)えて穀稼(こくさ)となつもの有実(み)つ」大智度論平安初期点「四・譬へば累堅(ツチクレ)のごとし」・十巻本和名抄「土塊 説文云塊ハ音会(お)和名豆知礼(し)土片也」・枕一五三・名おそろしきもの「あをふち、たにのほら、くらがね、つちくれ、いかづちは名のみにあらざ」・桐尾明恵上人伝記「上・幼き赤子愚にして塊(ツチクレ)を飯びたがるには」・正宗文庫本節用集「塊 ツチクレ」②(塊)墓を思でいう語。墓所。墳墓。多く、斎宮で用いる語。土塊所(つちくれどころ)。延喜式「五・神祇・斎宮忌詞略」墓所(つちくれ)。造伊勢二所太神宮宝基本記「完称(お)墓(お)つちくれ、已上倭姫命神託也」〔圖〕石に似た土であるところからツチクレ(土石)の義(東雅・大言海)。(2)クレは凝の義か「日本語源」賀茂百樹)。(3)ツチは土の義、クレはカスラ(塊)の反(名語記)。〔図〕ツチグル(鳥根)ツズコ「千葉」〔図〕今忠平安〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

つちくれどころ「土塊所」名 (つちくれ土塊) ①に同じ。つちくればと「土塊鳩・鳩」名 鳥「きじばと(鳩鳩)の異名。虎明本狂言・餌差くろつぐみ、つちくればと、山ばとは、たかのこのむときく物」・浮世草子「西鶴織留」一・二「霜前に土くれ鳩(バト)を懸とつとして山家からくれました」・本朝食鑑六「鳩ハ訓・波止」鳩鳩(ツチクレバト) 古俗 鳩鳩(きぢはと) 〔図〕ツチクレバト

つちくろい「土黒」名 土色のように黒い。〔図〕ツチグロイ

つちけ「土気」名 ①土のもつ性質。しめりけや土くささなど。六物図抄「壁のそばに竿をつて衣服をかけてをけは、いつからやら、連々に土気(ツチケ)に浸潤めくさるやうに」・松翁道話「四・中・元来垢は身によつて生じたもの故、土気でなければ落ちぬ」(2)(形動) 性行や考えなどがいなかさいこと。不粋なこと。また、そのさま。浄瑠璃・兼好法師物見車「上・早ふ拝また、また、きよろきよするも土けなり」・浄瑠璃・傾城反魂香「上・売られ買はれて北

国の土けの、賤(し)の里なれどよねの育ちは上田の、すいそんなしの大夫職」(3)「つちけいろ(土気色)の略。浮雲二葉亭四迷」一・「顔色は着味七分に土気(ツチケ)三分」〔図〕ツチケ

つちけ「離れぬ」 ①なにかさい所がある。まだ垢ぬけしていない。やばな所がまだ残っている。土が離れぬ。浮世草子「好色一代男」跋「天に指さし、土に土け放れず、臂をまけて」・浮世草子「西鶴置土産」一・「此男め大和より二三日跡に愛許(こ)も」へまいる、つちけのはなれぬ者なれば」・書翰「三・土気が離れぬ」

つちけいろ「土気色」名 土のような青黒い色。つちいろ。また、恐怖におののいたり、疲れて生気のない顔色などにもいう。つちけ。滑稽本「八笑人」初二「死人のごとく口びるまでつち気色に成」・怪談牡丹燈籠「三遊亭内朝」一五「眼は血走り、顔色は土気色(ツチケイロ)になり」〔図〕ツチケイロ

つちけくさし「土臭」名 ①「土臭」名 (つちけくさいとも) 土臭(ツチケクサ)き風情の醜(みにく)さと嘲笑はるべし」②に同じ。いさなり幸田露伴「三・天晴土臭臭(ツチケクサ)き風情の醜(みにく)さと嘲笑はるべし」

つちけむり「土煙」名 (つちけむりとも) 土砂がまいて上がつて煙のように見えるもの。浄瑠璃・井筒業平河内通「怨霊振分髪」花を吹き捲くはやち風、砂を飛ばす土煙(ツチケムリ)」。当世書生気質「坪内逍遙」二「晴れて風たつ日の土煙(ツチケムリ)は、新購の帽子為に白く」・雁・森嶋外七「広小路は往來の人の足許から、白い土煙(ツチケムリ)が立つのに」〔図〕ツチケムリ

つち「土」名 ①鶏の砂あび。高知県香美郡840 ②砂はこり。つちが立つ「岐阜県大垣535 ③「こり」土凝」名 ④固土のかたまり。土塊。青森県津軽44 茨城県北相馬郡205 (つちこり) 山梨県北巨摩郡509

つちこ「土塊・塊」名 中耳の中にある聴小骨の一つ。哺乳類に見られるもので、鼓膜に連絡しており、鼓膜の振動を内耳に伝える。・解体新書「二・耳篇」略「按諸説、耳之知(し)音也、鼓膜者在耳竅之末間、鑰骨著其後、其骨如「鍵」 〔図〕ツチコ

つちこね「土捏」名 ①土をこねること。壁土をこねること。また、その職人。左官。・雑俳・柳多留「初土こねは手車を進ひ幣を立て」・狂歌徳和歌後万載集序「久かたの糖売り、あらがねの土こね、千はやふる紙屑売」②土をこねる道具。〔図〕ツチコネ

つちこや「土小屋」名 肥料に用いるためごみなどを灰にして貯えておく小屋。土室(つちむろ)。灰部屋(はいべや)。〔図〕ツチコヤ

つちころび「土転」名 分水嶺。奈良県吉野・十津川地方でいう。

つちさく「土細工」名 土を焼いてつくった細工物。・浮世草子・傾城禁短気「一・四「土細工ツチザイク」の狐殿も福の神のつかはしめといへど」・滑稽本・東海道中膝栗毛六上「深草のさとは、家ごとに焼もの、土細工(ツチザイク)の商ふ見ゆれば」・雑俳・柳多留「七・土細工深ひ浅ひの草で出来」〔図〕ツチザク

つちさき「土崎」名 秋田市の地名。旧南秋田郡土崎港町で、昭和十六年(一九四二)秋田市に編入。雄物川旧河口の左岸にあり、工業地帯が造成されている。江戸時代、裏日本有数の港として栄えた土崎港は、秋田港と改称。〔図〕ツチサキ

つちさき「土狭間」名 (つちさきとも) 土で築いた障壁に設けた射撃や物見用の小さな窓。・太平記六・赤坂合戦事「土小間ツチサザ」櫓の上より、雨の降が如くに射ける矢」・太平記一五・三井寺合戦并当寺撞鐘事「是を防ぎける兵共、三方の土矢間(ツチサマ)より鎗(やり)、長刀を差出して」

つちさら「土盤」名 土製のさら。土を焼いてつくった盤。・延喜式「五・神祇・斎宮寮・供・新嘗料」略「土盤。碗。鍋各十口」

つちしき「土敷」名 御帳台(みちやうだい)の浜床(はまじか)の上に敷く縹緲(うげんべり)の畳。・栄花御賀「寝殿の中に、各各つちしきをひて御褥(ござ)ありつ」・満佐須計装束抄「おなじきまのもやに御帳あり。後の宮ながらは浜床あり。略」そのうへにさし満てたるうげん二帖を北南にしく、みなをまくらとするなり。このたたみをつちしきといふ

つちしばり「土縛」名 ①やしやぶし(夜叉五倍子)。但馬②ひめやしやぶ(姫夜叉五倍子)。栃木県西部・群馬県東部③撰津・丹波・広島県④つちしやじき「土機敷」名 江戸時代の歌舞伎劇場で、平土間の大衆席のこと。切落し。・洒落本・田舎芝居「二立目」並機敷が五百、土(ツチ)しやしきか、百つもしへつちしやしやじきはきりおとしのこと」

つちしよ「墓所」名 墓場。墓地。はかしよ。はかどころ。・地蔵菩薩靈驗記「二・一六」亡霊何ぞ助り玉はんことなからんやと涙を流して念誦して墓所(ツチシヨ)を去ぬ」

つちしよ「シャウ」名 江戸時代、川ざらいを請負った商人。・禁令考・前集・第五・巻四七・文化九年二月「本所警川通并江戸橋より大川出口迄定渡之儀申渡へ略」土取り揚げる商ひ候者に限り、土商株之儀相願ひ候に付、願ひ之通り申し付け候間」

つちとりもち【土鳥糞】一名 ツチトリモチ科の多年草。本州・九州、奄美の暖地でハイノキ・シロバイ・タロキなどの根に寄生する。高さ約一〇センチ。根茎は淡黄色で表面にかさぶたの白い斑点があり、径二センチ内外の不齊な球状塊に分裂している。秋から冬にかけ、赤褐色の大きな鱗片を基部に密生した肉質の花茎を直立し、頂に濃赤色で卵状橢圓形の花穂をつける。花穂には微小な黄色の雌花が無数にあるが、これと混生する卵円形の毛状体にかくされて見えない。雌株は発見されていないが、種子は単為生殖でできる。根茎から鳥もちをつくるのでこの名がある。やまでらばうず。つちやまもち。つちもち。〔実地植物図〕

つちとりもち【土鳥糞】一名 双子葉植物の一種。世界に約一八属一二〇余種あり、ほとんどが熱帯に生育し木の根に寄生し、葉緑素を欠く。地中には塊根が発達し、片葉のある頭状花序または穂状花序を直接地上へ伸ばす。雄花は三〜四個の花被、三〜四個の雄しゅうから成り、雌花には花被がなく、子房上位または下位で、胚珠には珠皮がある。堅果または石果様の果実をつける。〔実地植物図〕

つちな【土菜】一名 植物「つちぐり(土栗)」の異名。俳諧「畑芹」附録「炬びらきの日をしめし野の土菜哉」風雪。人情本・春色恵の花「初・二回」折から畑より土菜(ツチナ)を荷ひし人來れば。

つちな【土菜】一名 岐阜県益田郡535 愛知県42

つちな【土菜】一名 ハンマー投げ。三三郎(夏目漱石六)競争があった、長飛があった其次に徒抛(ツチナ)が始まった。〔実地植物図〕

つちな【土菜】一名 ①つちあそび(土遊)に同じ。歌舞伎・名歌徳三・三立「ハテ、女のざいに土なぶり。悪遊びをなさるふより、続松(ついま)・十種香花結びの遊びが、女中の手づきみ相応」

「随筆・嬉遊笑覧」六下「土なぶり砂あそび唐太宗の土城竹馬兒童之楽といへる是なり」②「つちいじり(土弄)」に同じ。浄瑠璃・鬼一法虎の巻三三「牡丹好(ばたな)ぎに、所々より名花の種を集め、修学の暇には、自身土(ツチ)なぶりを仕り」

「浄瑠璃・加羅先代秋八」花に心を移し居れば静気もせず。つちく土なぶりは身の養生

つちな【土鍋】一名 土焼きの鍋。どなべ。書陵部本名義抄「鍋ツチナベ」・日葡辞書「Tuchinabe(ツチナベ)」・浮世草子・近代艶隠者「四二」竈に土鍋(ツチナベ)掛て外には器物とても見へず」〔実地植物図〕

つちな【土均】一名 田畑などの土塊「つちくれ」をくだき、高低をならして平らにすること。また、それをする道具。〔実地植物図〕

つちにんぎょう【土人形】一名 ①泥土や粘土で作った人形。土を焼いて作った人形。土偶。

・浮世草子・好色五人女三・四「片見世に茶筌ちやせん」土人形(ツチニンギョウ)・かぶり太鼓、すこしは目馴し都めてきて、浄瑠璃・夕霧阿波鳴渡「中へ参に天満へよめて、是かふてきたと土人形の天神手綱に持せへ」日本橋「景鏡花」五二「一銭難(いちもんびな)ぢやね、土人形五個なのです」②考え方や行動が堅苦しくてやばった者。浮世草子・諸道「聴耳世間猿」一・三「親七兵衛は根から土人形(ツチニンギョウ)にて、世間何かはやううとも、江戸合羽(かっぱ)の煙草入に、茶袖(ちゃつむぎ)の置頭巾にて」〔実地植物図〕

つちにんぎょう【土遊】一名 水遊び。つちあそび。つちを破滅に導くこと。土仏の水遊び。浮世草子・西鶴置土産三二「土(ツチ)にんぎやうの水あそび次第にさびしくなつて」

つちめり【土塗】一名 土で塗ったもの。また、土を塗る人。左官。運歩色葉「土塗ツチメリ」

つちのえ【土の兄の意】一名 十干(じっかん)の第五番目。五行説によつて五行の土に十干の戊(ぼ)を配した。色葉字類抄「戊ツチノエ」・名語記「九」つちのえ、つちの、如何。戊はつちのえ。己はつちのと也。文明本節用集「戊ツチノエ」著雅(チヨウ)・ヨウ「ロドリゲス日本大文典「Tuchi-no-e(ツチノエ)」」〔実地植物図〕

つちのえ【土の弟の意】一名 十干(じっかん)の第五番目。五行説によつて五行の土に十干の己(ぎ)を配した。色葉字類抄「己ツチノエ」・名語記「九」己はつちのと也。文明本節用集「己ツチノエ」著雅(チヨウ)・ヨウ「ロドリゲス日本大文典「Tuchinoto(ツチノエ)」」〔実地植物図〕

つちのえ【土の弟の意】一名 十干(じっかん)の第五番目。五行説によつて五行の土に十干の己(ぎ)を配した。色葉字類抄「己ツチノエ」・名語記「九」己はつちのと也。文明本節用集「己ツチノエ」著雅(チヨウ)・ヨウ「ロドリゲス日本大文典「Tuchinoto(ツチノエ)」」〔実地植物図〕

つちのえ【土の弟の意】一名 十干(じっかん)の第五番目。五行説によつて五行の土に十干の己(ぎ)を配した。色葉字類抄「己ツチノエ」・名語記「九」己はつちのと也。文明本節用集「己ツチノエ」著雅(チヨウ)・ヨウ「ロドリゲス日本大文典「Tuchinoto(ツチノエ)」」〔実地植物図〕

つちのえ【土の弟の意】一名 十干(じっかん)の第五番目。五行説によつて五行の土に十干の己(ぎ)を配した。色葉字類抄「己ツチノエ」・名語記「九」己はつちのと也。文明本節用集「己ツチノエ」著雅(チヨウ)・ヨウ「ロドリゲス日本大文典「Tuchinoto(ツチノエ)」」〔実地植物図〕

つちのえ【土の弟の意】一名 十干(じっかん)の第五番目。五行説によつて五行の土に十干の己(ぎ)を配した。色葉字類抄「己ツチノエ」・名語記「九」己はつちのと也。文明本節用集「己ツチノエ」著雅(チヨウ)・ヨウ「ロドリゲス日本大文典「Tuchinoto(ツチノエ)」」〔実地植物図〕

つちのえ【土の弟の意】一名 十干(じっかん)の第五番目。五行説によつて五行の土に十干の己(ぎ)を配した。色葉字類抄「己ツチノエ」・名語記「九」己はつちのと也。文明本節用集「己ツチノエ」著雅(チヨウ)・ヨウ「ロドリゲス日本大文典「Tuchinoto(ツチノエ)」」〔実地植物図〕

つちのえ【土の弟の意】一名 十干(じっかん)の第五番目。五行説によつて五行の土に十干の己(ぎ)を配した。色葉字類抄「己ツチノエ」・名語記「九」己はつちのと也。文明本節用集「己ツチノエ」著雅(チヨウ)・ヨウ「ロドリゲス日本大文典「Tuchinoto(ツチノエ)」」〔実地植物図〕

つちのこ【種子】一名 ①ひたいと後頭部とがつき出した頭。さいち頭。浄瑠璃・曾我扇八景「上供先打割るつちのこ、鎧持奴が糸繫も、はり退け突退け割って乗る」②不器用な人。特に、針仕事のできない女。浮世草子・傾城禁短氣「一・三」(綾(ふくろ)び一つ縫ふ事がならず。それ故請出され、人の妻と成て管が会はず、大形は針手の利かぬ縫(ツチ)の子は、遣手に成て果つるも多し」・警喻「三」縫(ツチ)の子(こ)といふは針仕事得せぬ女をいへり」③目も口も鼻もない不具の子をたえていう語。仮名草子・奇異雜談集「二」三番目の産には縫(ツチ)ノ子(こ)をうむ。目はな口なきゆへに、やがてこれをころしおはんぬ」④男性器のたとえにいう語。浮世草子・好色産毛「一」除夜の大豆説む年に恥る気もなく、あはれ世になき者の縫(ツチ)の子(こ)、わが懐もむかしに替りて引舟の乗初」⑤蛇の一種という想像上の動物。文獻上は和漢三才図会に記載された「野蛇蛇ノツチ」がこれにあたるという。⑥藤(こ)も、縫(む)しなどを編む経(たて)の糸。俳諧・西国舟「ひまがない縫の子投げするすだれあり」・難①わらなどを打つ木のつち。岐阜県養老郡535 三重県65 滋賀県69 和歌山県62 徳島県編む道具の部品。細なものを巻いて下げる物。大阪府南河内郡642 愛媛県大島郡634 (つちんこ)高知県土佐郡846 (つちのこ)富山県礪波郡747 岡山県久保郡740 ③山にいたるという丸い短い怪蛇。奈良県南葛城郡669

つちのこ【種子】一名 ①ひたいと後頭部とがつき出した頭。さいち頭。浄瑠璃・曾我扇八景「上供先打割るつちのこ、鎧持奴が糸繫も、はり退け突退け割って乗る」②不器用な人。特に、針仕事のできない女。浮世草子・傾城禁短氣「一・三」(綾(ふくろ)び一つ縫ふ事がならず。それ故請出され、人の妻と成て管が会はず、大形は針手の利かぬ縫(ツチ)の子は、遣手に成て果つるも多し」・警喻「三」縫(ツチ)の子(こ)といふは針仕事得せぬ女をいへり」③目も口も鼻もない不具の子をたえていう語。仮名草子・奇異雜談集「二」三番目の産には縫(ツチ)ノ子(こ)をうむ。目はな口なきゆへに、やがてこれをころしおはんぬ」④男性器のたとえにいう語。浮世草子・好色産毛「一」除夜の大豆説む年に恥る気もなく、あはれ世になき者の縫(ツチ)の子(こ)、わが懐もむかしに替りて引舟の乗初」⑤蛇の一種という想像上の動物。文獻上は和漢三才図会に記載された「野蛇蛇ノツチ」がこれにあたるという。⑥藤(こ)も、縫(む)しなどを編む経(たて)の糸。俳諧・西国舟「ひまがない縫の子投げするすだれあり」・難①わらなどを打つ木のつち。岐阜県養老郡535 三重県65 滋賀県69 和歌山県62 徳島県編む道具の部品。細なものを巻いて下げる物。大阪府南河内郡642 愛媛県大島郡634 (つちんこ)高知県土佐郡846 (つちのこ)富山県礪波郡747 岡山県久保郡740 ③山にいたるという丸い短い怪蛇。奈良県南葛城郡669

つちのこ【種子】一名 ①ひたいと後頭部とがつき出した頭。さいち頭。浄瑠璃・曾我扇八景「上供先打割るつちのこ、鎧持奴が糸繫も、はり退け突退け割って乗る」②不器用な人。特に、針仕事のできない女。浮世草子・傾城禁短氣「一・三」(綾(ふくろ)び一つ縫ふ事がならず。それ故請出され、人の妻と成て管が会はず、大形は針手の利かぬ縫(ツチ)の子は、遣手に成て果つるも多し」・警喻「三」縫(ツチ)の子(こ)といふは針仕事得せぬ女をいへり」③目も口も鼻もない不具の子をたえていう語。仮名草子・奇異雜談集「二」三番目の産には縫(ツチ)ノ子(こ)をうむ。目はな口なきゆへに、やがてこれをころしおはんぬ」④男性器のたとえにいう語。浮世草子・好色産毛「一」除夜の大豆説む年に恥る気もなく、あはれ世になき者の縫(ツチ)の子(こ)、わが懐もむかしに替りて引舟の乗初」⑤蛇の一種という想像上の動物。文獻上は和漢三才図会に記載された「野蛇蛇ノツチ」がこれにあたるという。⑥藤(こ)も、縫(む)しなどを編む経(たて)の糸。俳諧・西国舟「ひまがない縫の子投げするすだれあり」・難①わらなどを打つ木のつち。岐阜県養老郡535 三重県65 滋賀県69 和歌山県62 徳島県編む道具の部品。細なものを巻いて下げる物。大阪府南河内郡642 愛媛県大島郡634 (つちんこ)高知県土佐郡846 (つちのこ)富山県礪波郡747 岡山県久保郡740 ③山にいたるという丸い短い怪蛇。奈良県南葛城郡669

つちのこ【種子】一名 ①ひたいと後頭部とがつき出した頭。さいち頭。浄瑠璃・曾我扇八景「上供先打割るつちのこ、鎧持奴が糸繫も、はり退け突退け割って乗る」②不器用な人。特に、針仕事のできない女。浮世草子・傾城禁短氣「一・三」(綾(ふくろ)び一つ縫ふ事がならず。それ故請出され、人の妻と成て管が会はず、大形は針手の利かぬ縫(ツチ)の子は、遣手に成て果つるも多し」・警喻「三」縫(ツチ)の子(こ)といふは針仕事得せぬ女をいへり」③目も口も鼻もない不具の子をたえていう語。仮名草子・奇異雜談集「二」三番目の産には縫(ツチ)ノ子(こ)をうむ。目はな口なきゆへに、やがてこれをころしおはんぬ」④男性器のたとえにいう語。浮世草子・好色産毛「一」除夜の大豆説む年に恥る気もなく、あはれ世になき者の縫(ツチ)の子(こ)、わが懐もむかしに替りて引舟の乗初」⑤蛇の一種という想像上の動物。文獻上は和漢三才図会に記載された「野蛇蛇ノツチ」がこれにあたるという。⑥藤(こ)も、縫(む)しなどを編む経(たて)の糸。俳諧・西国舟「ひまがない縫の子投げするすだれあり」・難①わらなどを打つ木のつち。岐阜県養老郡535 三重県65 滋賀県69 和歌山県62 徳島県編む道具の部品。細なものを巻いて下げる物。大阪府南河内郡642 愛媛県大島郡634 (つちんこ)高知県土佐郡846 (つちのこ)富山県礪波郡747 岡山県久保郡740 ③山にいたるという丸い短い怪蛇。奈良県南葛城郡669

つちのこ【種子】一名 ①ひたいと後頭部とがつき出した頭。さいち頭。浄瑠璃・曾我扇八景「上供先打割るつちのこ、鎧持奴が糸繫も、はり退け突退け割って乗る」②不器用な人。特に、針仕事のできない女。浮世草子・傾城禁短氣「一・三」(綾(ふくろ)び一つ縫ふ事がならず。それ故請出され、人の妻と成て管が会はず、大形は針手の利かぬ縫(ツチ)の子は、遣手に成て果つるも多し」・警喻「三」縫(ツチ)の子(こ)といふは針仕事得せぬ女をいへり」③目も口も鼻もない不具の子をたえていう語。仮名草子・奇異雜談集「二」三番目の産には縫(ツチ)ノ子(こ)をうむ。目はな口なきゆへに、やがてこれをころしおはんぬ」④男性器のたとえにいう語。浮世草子・好色産毛「一」除夜の大豆説む年に恥る気もなく、あはれ世になき者の縫(ツチ)の子(こ)、わが懐もむかしに替りて引舟の乗初」⑤蛇の一種という想像上の動物。文獻上は和漢三才図会に記載された「野蛇蛇ノツチ」がこれにあたるという。⑥藤(こ)も、縫(む)しなどを編む経(たて)の糸。俳諧・西国舟「ひまがない縫の子投げするすだれあり」・難①わらなどを打つ木のつち。岐阜県養老郡535 三重県65 滋賀県69 和歌山県62 徳島県編む道具の部品。細なものを巻いて下げる物。大阪府南河内郡642 愛媛県大島郡634 (つちんこ)高知県土佐郡846 (つちのこ)富山県礪波郡747 岡山県久保郡740 ③山にいたるという丸い短い怪蛇。奈良県南葛城郡669

つちのこ【種子】一名 ①ひたいと後頭部とがつき出した頭。さいち頭。浄瑠璃・曾我扇八景「上供先打割るつちのこ、鎧持奴が糸繫も、はり退け突退け割って乗る」②不器用な人。特に、針仕事のできない女。浮世草子・傾城禁短氣「一・三」(綾(ふくろ)び一つ縫ふ事がならず。それ故請出され、人の妻と成て管が会はず、大形は針手の利かぬ縫(ツチ)の子は、遣手に成て果つるも多し」・警喻「三」縫(ツチ)の子(こ)といふは針仕事得せぬ女をいへり」③目も口も鼻もない不具の子をたえていう語。仮名草子・奇異雜談集「二」三番目の産には縫(ツチ)ノ子(こ)をうむ。目はな口なきゆへに、やがてこれをころしおはんぬ」④男性器のたとえにいう語。浮世草子・好色産毛「一」除夜の大豆説む年に恥る気もなく、あはれ世になき者の縫(ツチ)の子(こ)、わが懐もむかしに替りて引舟の乗初」⑤蛇の一種という想像上の動物。文獻上は和漢三才図会に記載された「野蛇蛇ノツチ」がこれにあたるという。⑥藤(こ)も、縫(む)しなどを編む経(たて)の糸。俳諧・西国舟「ひまがない縫の子投げするすだれあり」・難①わらなどを打つ木のつち。岐阜県養老郡535 三重県65 滋賀県69 和歌山県62 徳島県編む道具の部品。細なものを巻いて下げる物。大阪府南河内郡642 愛媛県大島郡634 (つちんこ)高知県土佐郡846 (つちのこ)富山県礪波郡747 岡山県久保郡740 ③山にいたるという丸い短い怪蛇。奈良県南葛城郡669

つちのこ【種子】一名 ①ひたいと後頭部とがつき出した頭。さいち頭。浄瑠璃・曾我扇八景「上供先打割るつちのこ、鎧持奴が糸繫も、はり退け突退け割って乗る」②不器用な人。特に、針仕事のできない女。浮世草子・傾城禁短氣「一・三」(綾(ふくろ)び一つ縫ふ事がならず。それ故請出され、人の妻と成て管が会はず、大形は針手の利かぬ縫(ツチ)の子は、遣手に成て果つるも多し」・警喻「三」縫(ツチ)の子(こ)といふは針仕事得せぬ女をいへり」③目も口も鼻もない不具の子をたえていう語。仮名草子・奇異雜談集「二」三番目の産には縫(ツチ)ノ子(こ)をうむ。目はな口なきゆへに、やがてこれをころしおはんぬ」④男性器のたとえにいう語。浮世草子・好色産毛「一」除夜の大豆説む年に恥る気もなく、あはれ世になき者の縫(ツチ)の子(こ)、わが懐もむかしに替りて引舟の乗初」⑤蛇の一種という想像上の動物。文獻上は和漢三才図会に記載された「野蛇蛇ノツチ」がこれにあたるという。⑥藤(こ)も、縫(む)しなどを編む経(たて)の糸。俳諧・西国舟「ひまがない縫の子投げするすだれあり」・難①わらなどを打つ木のつち。岐阜県養老郡535 三重県65 滋賀県69 和歌山県62 徳島県編む道具の部品。細なものを巻いて下げる物。大阪府南河内郡642 愛媛県大島郡634 (つちんこ)高知県土佐郡846 (つちのこ)富山県礪波郡747 岡山県久保郡740 ③山にいたるという丸い短い怪蛇。奈良県南葛城郡669

つちのこ【種子】一名 ①ひたいと後頭部とがつき出した頭。さいち頭。浄瑠璃・曾我扇八景「上供先打割るつちのこ、鎧持奴が糸繫も、はり退け突退け割って乗る」②不器用な人。特に、針仕事のできない女。浮世草子・傾城禁短氣「一・三」(綾(ふくろ)び一つ縫ふ事がならず。それ故請出され、人の妻と成て管が会はず、大形は針手の利かぬ縫(ツチ)の子は、遣手に成て果つるも多し」・警喻「三」縫(ツチ)の子(こ)といふは針仕事得せぬ女をいへり」③目も口も鼻もない不具の子をたえていう語。仮名草子・奇異雜談集「二」三番目の産には縫(ツチ)ノ子(こ)をうむ。目はな口なきゆへに、やがてこれをころしおはんぬ」④男性器のたとえにいう語。浮世草子・好色産毛「一」除夜の大豆説む年に恥る気もなく、あはれ世になき者の縫(ツチ)の子(こ)、わが懐もむかしに替りて引舟の乗初」⑤蛇の一種という想像上の動物。文獻上は和漢三才図会に記載された「野蛇蛇ノツチ」がこれにあたるという。⑥藤(こ)も、縫(む)しなどを編む経(たて)の糸。俳諧・西国舟「ひまがない縫の子投げするすだれあり」・難①わらなどを打つ木のつち。岐阜県養老郡535 三重県65 滋賀県69 和歌山県62 徳島県編む道具の部品。細なものを巻いて下げる物。大阪府南河内郡642 愛媛県大島郡634 (つちんこ)高知県土佐郡846 (つちのこ)富山県礪波郡747 岡山県久保郡740 ③山にいたるという丸い短い怪蛇。奈良県南葛城郡669

つちのこ【種子】一名 ①ひたいと後頭部とがつき出した頭。さいち頭。浄瑠璃・曾我扇八景「上供先打割るつちのこ、鎧持奴が糸繫も、はり退け突退け割って乗る」②不器用な人。特に、針仕事のできない女。浮世草子・傾城禁短氣「一・三」(綾(ふくろ)び一つ縫ふ事がならず。それ故請出され、人の妻と成て管が会はず、大形は針手の利かぬ縫(ツチ)の子は、遣手に成て果つるも多し」・警喻「三」縫(ツチ)の子(こ)といふは針仕事得せぬ女をいへり」③目も口も鼻もない不具の子をたえていう語。仮名草子・奇異雜談集「二」三番目の産には縫(ツチ)ノ子(こ)をうむ。目はな口なきゆへに、やがてこれをころしおはんぬ」④男性器のたとえにいう語。浮世草子・好色産毛「一」除夜の大豆説む年に恥る気もなく、あはれ世になき者の縫(ツチ)の子(こ)、わが懐もむかしに替りて引舟の乗初」⑤蛇の一種という想像上の動物。文獻上は和漢三才図会に記載された「野蛇蛇ノツチ」がこれにあたるという。⑥藤(こ)も、縫(む)しなどを編む経(たて)の糸。俳諧・西国舟「ひまがない縫の子投げするすだれあり」・難①わらなどを打つ木のつち。岐阜県養老郡535 三重県65 滋賀県69 和歌山県62 徳島県編む道具の部品。細なものを巻いて下げる物。大阪府南河内郡642 愛媛県大島郡634 (つちんこ)高知県土佐郡846 (つちのこ)富山県礪波郡747 岡山県久保郡740 ③山にいたるという丸い短い怪蛇。奈良県南葛城郡669

つちのこ【種子】一名 ①ひたいと後頭部とがつき出した頭。さいち頭。浄瑠璃・曾我扇八景「上供先打割るつちのこ、鎧持奴が糸繫も、はり退け突退け割って乗る」②不器用な人。特に、針仕事のできない女。浮世草子・傾城禁短氣「一・三」(綾(ふくろ)び一つ縫ふ事がならず。それ故請出され、人の妻と成て管が会はず、大形は針手の利かぬ縫(ツチ)の子は、遣手に成て果つるも多し」・警喻「三」縫(ツチ)の子(こ)といふは針仕事得せぬ女をいへり」③目も口も鼻もない不具の子をたえていう語。仮名草子・奇異雜談集「二」三番目の産には縫(ツチ)ノ子(こ)をうむ。目はな口なきゆへに、やがてこれをころしおはんぬ」④男性器のたとえにいう語。浮世草子・好色産毛「一」除夜の大豆説む年に恥る気もなく、あはれ世になき者の縫(ツチ)の子(こ)、わが懐もむかしに替りて引舟の乗初」⑤蛇の一種という想像上の動物。文獻上は和漢三才図会に記載された「野蛇蛇ノツチ」がこれにあたるという。⑥藤(こ)も、縫(む)しなどを編む経(たて)の糸。俳諧・西国舟「ひまがない縫の子投げするすだれあり」・難①わらなどを打つ木のつち。岐阜県養老郡535 三重県65 滋賀県69 和歌山県62 徳島県編む道具の部品。細なものを巻いて下げる物。大阪府南河内郡642 愛媛県大島郡634 (つちんこ)高知県土佐郡846 (つちのこ)富山県礪波郡747 岡山県久保郡740 ③山にいたるという丸い短い怪蛇。奈良県南葛城郡669

つちのこ【種子】一名 ①ひたいと後頭部とがつき出した頭。さいち頭。浄瑠璃・曾我扇八景「上供先打割るつちのこ、鎧持奴が糸繫も、はり退け突退け割って乗る」②不器用な人。特に、針仕事のできない女。浮世草子・傾城禁短氣「一・三」(綾(ふくろ)び一つ縫ふ事がならず。それ故請出され、人の妻と成て管が会はず、大形は針手の利かぬ縫(ツチ)の子は、遣手に成て果つるも多し」・警喻「三」縫(ツチ)の子(こ)といふは針仕事得せぬ女をいへり」③目も口も鼻もない不具の子をたえていう語。仮名草子・奇異雜談集「二」三番目の産には縫(ツチ)ノ子(こ)をうむ。目はな口なきゆへに、やがてこれをころしおはんぬ」④男性器のたとえにいう語。浮世草子・好色産毛「一」除夜の大豆説む年に恥る気もなく、あはれ世になき者の縫(ツチ)の子(こ)、わが懐もむかしに替りて引舟の乗初」⑤蛇の一種という想像上の動物。文獻上は和漢三才図会に記載された「野蛇蛇ノツチ」がこれにあたるという。⑥藤(こ)も、縫(む)しなどを編む経(たて)の糸。俳諧・西国舟「ひまがない縫の子投げするすだれあり」・難①わらなどを打つ木のつち。岐阜県養老郡535 三重県65 滋賀県69 和歌山県62 徳島県編む道具の部品。細なものを巻いて下げる物。大阪府南河内郡642 愛媛県大島郡634 (つちんこ)高知県土佐郡846 (つちのこ)富山県礪波郡747 岡山県久保郡740 ③山にいたるという丸い短い怪蛇。奈良県南葛城郡669

つちはり【土橋】一名 (つちばし)とも 木などを組んでつくった上に土をおおひかけた橋。どばし。十巻本和名抄三「土橋 唐韻云圯人音怡 豆知波之土橋也」・光悦本謡曲「張良」かひといふ所につちはしあり」・日葡辞書「Tuchibaxi(ツチバシ)」訳「表面を土でおおった橋」・仮名草子・東海道名所記四「此橋いにしへは土(ツチ)橋にて侍べりしかば」〔実地植物図〕

つちはり【土橋】一名 姓氏の一つ。〔実地植物図〕

つちはり【土橋】一名 陳生薑(ひねしょう)のこと。観智院本名義抄「薑ツチハシカミ」・藻塩草十八・和名干薑都ちはしかみ」・物品識名拾遺「ツチハシカミ 乾薑 生薑を日に晒し乾すもの」〔実地植物図〕

つちばち【土蜂】一名 ①膜翅(まくし)目ツチバチ科に属するハチの総称。比較的大形で体長二〜三センチ、腹部は一般に細長い。体は黒色で、多くは黄色・褐色などの横じまがある。花の蜜に集まり、雌は地中のコガネムシの幼虫を捕え、麻痺させて卵をうみつけ、幼虫のえさにする。日本にはハラナガツチバチ・モンハラナガツチバチなど約一〇種。②昆虫(あなばち(六蜂))の異名。《季・春》・大和本草「一四」蜂種類多し。つねの蜂の外、土蜂あり。蜜蜂あり」〔実地植物図〕

つちばち【土蜂】一名 バッタ科の昆虫。はねを含めて全長三〇〜四五ミリ、体形はイナゴに似ている。上ねは黄褐色で細い黄色のたてすじが走り、先端は黒色を帯びる。本州に分布し、水辺の草むらに多い。つちばちといふ名はつち、土、おほとびむし、つちいなこ、つちばち、土州、まぐそだか、勢州、くると、江州」〔実地植物図〕

つちばち【土蜂】一名 「つちはりつけ(土蜂)」の变化した語。平治下・頼朝義兵を挙げらる事「頭殿の御墓の前に、左右の手足をもつて竿をひろがせ、土に板をきて、土八付といふ物にして、なぶりごろしにせられける」

つちはり【土針】一名 シソ科の植物メハジキ、または、ウツボレグサのことか。一説にユリ科のツクバネソウやエンレイソウにあつてゐる。《季・夏》・万葉七「一三三八」吾が屋前に生ふる土針(つちはり)心ゆも想はぬ人の衣に摺らぬな作者未詳」・十巻本和名抄「一〇」王孫 本草云王孫一名黄孫八沼波利久佐世間云都知波利」・俳諧・牛飼「二」夏「土針の花も

つちはり【土針】一名 シソ科の植物メハジキ、または、ウツボレグサのことか。一説にユリ科のツクバネソウやエンレイソウにあつてゐる。《季・夏》・万葉七「一三三八」吾が屋前に生ふる土針(つちはり)心ゆも想はぬ人の衣に摺らぬな作者未詳」・十巻本和名抄「一〇」王孫 本草云王孫一名黄孫八沼波利久佐世間云都知波利」・俳諧・牛飼「二」夏「土針の花も

つちはり【土針】一名 シソ科の植物メハジキ、または、ウツボレグサのことか。一説にユリ科のツクバネソウやエンレイソウにあつてゐる。《季・夏》・万葉七「一三三八」吾が屋前に生ふる土針(つちはり)心ゆも想はぬ人の衣に摺らぬな作者未詳」・十巻本和名抄「一〇」王孫 本草云王孫一名黄孫八沼波利久佐世間云都知波利」・俳諧・牛飼「二」夏「土針の花も

つちはり【土針】一名 シソ科の植物メハジキ、または、ウツボレグサのことか。一説にユリ科のツクバネソウやエンレイソウにあつてゐる。《季・夏》・万葉七「一三三八」吾が屋前に生ふる土針(つちはり)心ゆも想はぬ人の衣に摺らぬな作者未詳」・十巻本和名抄「一〇」王孫 本草云王孫一名黄孫八沼波利久佐世間云都知波利」・俳諧・牛飼「二」夏「土針の花も

つちはり【土針】一名 シソ科の植物メハジキ、または、ウツボレグサのことか。一説にユリ科のツクバネソウやエンレイソウにあつてゐる。《季・夏》・万葉七「一三三八」吾が屋前に生ふる土針(つちはり)心ゆも想はぬ人の衣に摺らぬな作者未詳」・十巻本和名抄「一〇」王孫 本草云王孫一名黄孫八沼波利久佐世間云都知波利」・俳諧・牛飼「二」夏「土針の花も

にある檣柱の如し。こは昔は禁中にもありし事なり」
 ＊蓼喰ふ虫へ谷崎潤一郎「四煙の真つぐに立ちの
 ぼる土氈ツチヒサシ」の外を仰だい」 〔開函會之図〕
 つちひとがた「〔名〕植物」そくす「蒔藋」の異名。＊和
 名考異国史大系延喜式附録「蒔藋都知比止加多」
 つちひとくさ「〔名〕植物」そくす「蒔藋」の異名。＊延
 喜式・三七・典業「中宮臘月御業略蒔藋」ツチヒトク
 サ「二両。商陸（いほすき）二両」
 つちびな「〔土雛〕〔名〕雛人形的一种。土で雛を作り、
 焼いて胡粉・丹・緑青などで彩色したもの。＊随筆・骨
 董集下・前二〇「享保の比の土雛ツチヒナ図す
 べて土をものづくり焼て、胡粉、丹、緑青などにて
 いろど、おのづから古色あり。略今も田舎には女
 子生れてはじめての三月の節句に、江戸の今戸焼の
 土（ツチ）びな八土のあねさまと云ふをおくりて祝ふ
 よし」。俳諧八番目日記「文政二年二月、土雛も祭の花
 はありにけり」 〔開函會之図〕
 つちひばち「〔土火鉢〕〔名〕素焼き、または陶製の火
 鉢。＊俳諧・享和句帖三年一月二日「浅くふは昼も
 寝よげよ土火鉢」。歌舞伎・梅柳若葉加賀染序幕「板
 の間に衝立て前に置き、土火鉢（ツチヒバチ）にて、蚊
 をいぶして居る」 〔開函會之図〕
 つちひばり「〔土雲雀〕〔名〕鳥」たひばり「〔田雲雀〕
 異名。＊季・秋」 〔因山梨県・静岡県・和歌山県北部
 愛媛県 030（つちひばる）徳島県名東部 030 〔開函會之図〕
 つちびやくしよう「ビヤクシャウ」〔土百姓〕〔名〕農夫。
 百姓。また、貧農。＊どびやくしよう。＊浮世草子・元
 禄大平記七・三「鍛鍊とりし土百姓（ツチビヤクシヤウ）
 ・井田の法をまもり」。浄瑠璃・源平布引滝「三平
 家の縁と嫌はれては、娘が未来の迷ひといひ、一生埋
 れる土百姓」 〔開函ツチビヤクショー 會之図〕
 つちひらたがね「〔土平田船・土船〕〔名〕土を運搬す
 る船の一種で、船体を平田（ひらた）造りとするもの。
 船造土船。＊川図巻「土船船 俗に土舟と云。八上
 口 凡長二丈八九尺、横八尺位」
 つちぶた「〔土豚〕〔名〕ツチブタ科の哺乳類。体長一
 ・一五呎。太く長い尾と、長く立った耳をもつ。吻
 （ふんば）は細長く、先端はブタの鼻に似ている。黄褐
 色の皮膚に褐色の毛がまばらにはえる。蹄に似た太
 きなつめで穴を掘ってすみ、夜、アリやシロアリの塔
 をこわして捕食する。アフリカの草原に分布する。
 アフリカありくい。 〔開函會之図〕
 つちふて「〔土筆〕〔名〕土筆（つくし）をいう女房詞。土
 の筆。＊女言葉「つくつくしの事 つち筆」
 つちぶね「〔土船・土舟〕〔名〕①土を運送する船の総
 称。江戸時代の土船には極印をうけた古土船・新土
 船。在土船の三種が合計六六艘あり、山土を積んで大
 坂市中の銅細工や鍋釜の鋳物師などへ売った。船の
 長さ三・五尺（約九八五）幅五・七尺（約一・七三）

び、一人乗りの小型の川船。土取り船。・和漢船用
 集十五・江湖川船之部「土」船 諸国にあり。摂州
 にて呼所は山土、赤土を運送するの舟也。・随筆・守
 貞漫稿十四・土船 文化九年願濟也。文化中、土船持百
 三十四戸船數三百余艘、是江戸のみ也。・すみだ川
 へ永井荷風・九堀割に繋いだ土船「チブネ」からた
 人足が「略」類に土を運んだとある。②土で作った
 蘆花。一〇・七「あなたのは大船ぢやない、狸の土舟
 船。日本の昔話、かちかち山」に出てくる船。どろ船。
 談義本「古朽木五」かちかち山の因縁を頭し、水桶
 の内の苦みは土舟の報を見せたり。・思出の記・徳富
 蘆花。一〇・七「あなたのは大船ぢやない、狸の土舟
 船。日本の昔話、かちかち山」に出てくる船。どろ船。
 中「うまれだてからつちふまず、銭の数しらず」^{〔閉窗〕}
 金五ツツクマズ〔富山県〕^{〔閉窗〕} 余三〇
 つちふる〔土降〕自良四 大風に吹き上げられた土
 砂が降り落ちる。・季・春・書院部本名義抄「土ツ
 チフル〔選〕」・字鏡集・羅ハイツチフルウツム」
 ・俳諧・奥の細道・尿前の関「雲端につちふる心地し
 て」^{〔註〕} 〔註〕名義、和玉
 つちふるい。いふる〔土篩〕^{〔名〕} 土をふるい分ける目
 の荒いふるい。多く竹で編んでつくる。〔閉窗〕^{〔繪〕}
 つちへん〔土辺〕^{〔名〕} 地面。・咄本「輕口露がはなし」三
 一六「土ツチべにをりてひざまづき、つつしんで待
 うけた」・浄瑠璃・傾城・反魂香「上又平つちべに額
 をすり付け」
 つちべた〔名〕^{〔閉窗〕} 地面。地べた。石川県江沼郡455
 長野県上伊那郡530 岐阜県上郡541 三重県度会郡610
 兵庫県赤穂郡652 淡路島660 備後74 広島県高田郡755
 徳島県803 愛媛県831（つちびた）長野県上伊那郡530
 （つちびた）千葉県葛飾郡富勢264（つちんだ）岐
 阜県大野郡白川539
 つちへん〔土偏〕^{〔名〕} 漢字の偏の一つ。地「垣」「城」
 などの「土」の部分を使う。この偏を持つ字の大部
 分は、字典で土部に属する。どへん。・雑俳・柳多留
 四五「土へんと塩やを言つて味噌を付」^{〔閉窗〕} 〔繪〕^{〔繪〕}
 余三〇
 つちば〔土穂〕^{〔名〕} 刈り取った後、土の上に落ち散
 った穀物の穂。落ち穂。つぶ。つば。
 つちほう〔榎棒〕^{〔名〕} 〔閉窗〕^{〔閉窗〕} 打って柔かくす
 ものに使う木槌。岩手県江刺郡129 宮城県玉造郡143
 つちほうろく。ハコロク「土炮烙」^{〔名〕} 素焼の平たい
 鍋。土で作った炮烙。・狂言記・蜀妓・炮烙「つちほう

ろくなとはかざらする物ではござらぬ」〔笑〕ツチ
ホーロク〔繪之因〕

ちほぐり〔土掘〕〔名〕〔因〕農民。百姓。広島県高田
郡75〔ちほじり〕東京都八王子市280

ちほにけり〔土埃〕〔名〕〔つちほこりとも〕細かい
土が風に吹き上げられてむむりのように見えるもの。
すなほこり。つちけむり。書言字考節用集一
「糴ツチボコリ〔釈名〕風而雨土曰糴」咄本・鹿
の巻第一二四つ時分より大風ふきて、つちほこり
をびたし」・赤光斎藤茂吉葬り火「わが足より汁
いでてやや痛みあり靴にたまりし土ほこりかも」

〔笑〕繪之因 〔因〕書言
市07 長野県・和歌山県018

ちほじり〔土穿〕〔名〕土を掘り返すこと。また、そ
れを業とする農夫。土人足などをいやしめていう
語。つちほぜり。洒落本・鄭意地一「どいつもこ
いつも土〔ツチ〕はぢりめらが刀作〔なたづくり〕で、
きのきいたつらあひとつもない」〔笑〕繪之因

ちほぜり〔土穿〕〔名〕「つちほじり〔土穿〕」に同じ。
・浄瑠璃五十年忌歌念仏上・身どもは和泉のどん百姓
・土ほぜりでおぢやれ共」・歌舞伎・絵本合法齋・四
幕「百姓の子だが、あまっ子の時分から、田植急だの
何のと土ほぜりが嫌えてネ」人情本・仮名文章娘節
用後六回「又門口に立出て、土ほぜりして居るをり
から」〔笑〕繪之因

ちほたる〔土螢〕〔名〕はねが退化したホタルの雌
の成虫、または幼虫。形はウジ状で、水中または水
辺の草むらにすみ、巻き貝などを食べる。多くは発
光する。・和漢三才図會五三「螢へ略」燭へ豆知保太
留「俗云土螢也。田圃溝辺七化之。無燭不能飛而
光」・重訂本草綱目啓蒙三十七・化生「螢火へ略」螢蛆は
つちぼたるみづぼたる筑前、むしぼたる筑後、み
みずぼたる雲州、水中に生し形細長くて翼なくし
て尾に光あり」〔笑〕繪之因

ちぼたんこ〔土穂団子〕〔名〕集めた土穂の米から
作った団子。つぼ団子。〔笑〕ツチボダンゴ 〔繪之因〕

ちぼとけ〔土仏〕〔名〕土をこねたり、焼き固めたた
りして作った仏像。どぶつ。・日葡辞書「Tuchiboto
ro ツチボトケ」・訳「土で作った偶像」・俳諧・鷹派
波一十雪ぼとけ消えてのあとや土仏へ重方」〔笑〕
繪之因

つちぼとけが 夕立（ゆうだち）に逢（あ）ったよう
（土が雨で流されてしまうところから）しょんぼ
りとして見るかげもないさま。みずぼらしく悄然
としているさまのたとえ。・虎明本狂言・金岡「さ
ればこそ、あのやうな、つちぼとけの、ゆふだちに
あふたやうなりで、せびらかす程に」

つちぼとけの水遊（みずあそび）「水なぶり・水狂
（みづかま）」（土が水中でとけて崩れていくと

つちみかど 【土御門】 ①平安京大内裏外郭東面の土上門の異称。また、西面の土上門を西の土御門と称する。築地を切り抜いただけで、屋根のないところからいう。土御門大路に通ずる。＊枕九九五月の御精進のほど「雨まことに降りぬ。」などか、こ御門御門のやうにもあらず、このつちみかどしも、かう上もなくしめけん」と、けふこそいとにくけれ」などいひて、「拾芥抄中・宮城部十二門此外有土上門八陽明門北東面号土御門」▽西門二八殷富門南面西土御門也▽ ②（土御門大路の略）平安京の東西の通りの一つで、一条大路の二筋南にあり幅員一〇丈。中央部は大内裏によって断たれ、左京の方を上東門大路ともいい、ほぼ現在のの上長者町通にあたる。右京の方はほぼ現在の仁和寺街道にあたる。＊平松本大鏡一・花山院さて土御門よりひんがしざまにゐていだしまらせ給に、晴明が家のまへをわたらせ給へば」＊平治上・主上六波羅へ行幸の事「上東門をかりとやりいだす程こそあれ、土御門をとぶがごとくに行幸成」 ③名「つちみかどしんと」（土御門神道）の略。＊雑俳・柳多留八七「地天泰雲の上にも土御門」 〔笈苗繪之図〕 〔吉野書下学文明伊京天正・鐘興・易林〕

つちみかど 【土御門】 姓氏の一つ。 〔笈苗繪之図〕

つちみかどみちちか 【土御門通親】 平安末期鎌倉初期の廷臣。村上源氏の出。内大臣雅通の長男。平清盛、後白河法皇などと結び、朝廷の要職を歴任。鎌倉幕府に対抗して、後鳥羽天皇讓位を行ない、院政を助けた。久安五・建仁二年（一一四九—一二〇二）

つちみかどもんぜきりゅう 【土御門御門跡流】 ①『名』天台宗の恵心（えしん）四流の一つ。行泉房流の祖靜明の門人、無動寺松林房の住持政海を祖とする。 〔笈苗ツチミカドゴモンゼキリュウ 〔繪之図〕〕

つちみかどさま 【土御門様】 ①名』土で作った三月の内裏雛。今戸焼の雛、仙台の堤焼の雛などはその一つ。＊雑俳・柳多留一八「土みかどさまをあねへもかざるなり」

つちみかどしんとう 【シントウ】土御門神道 ①名』江戸初期に出た垂加神道の一派。日月千支の運行を考え、相生相剋の道理を推して、吉凶を定めるという垂加流と伊勢流の神道を羽翼として立てた陰陽道による神道。土御門泰福やすとみが祖父泰重からの相伝によって元禄（一六八八—一七一〇）頃に創唱し、弟子渋川春海によって大成された。安倍（あべ）神道。安家（あんげ）神道。天赦（てんしゃ）神道。つちみかど。 〔笈苗ツチミカドシントウ 〔繪之図〕〕

つちみかどだいり 【土御門内裏】 京都土御門大路の南、烏丸の西にあった里内裏。永久五年（一一一七）造営。のちや東方に一町ほどのびて、北朝天皇の御所となり、以後、歴代皇居として今日の京都御所

となる。*台記康治元年九月二〇日「己酉、幸三土御門内裏云々」。拾芥抄中・諸名所部「土御門内裏へ土御門南鳥丸殿今の太川也」。*随筆・玉勝間「四土御門内裏は、土御門の南、鳥丸の西と拾芥抄に見えたり。略」今の内裏は、正親町院の御世、信長公秀吉公などの時に造営せうやうし地なるべし。これも土御門内裏の外廓の、やせられし地東北へ広くなりて今の世の外廓とはなれりとおぼしければ」

つちみかどてんのう：テンワウ「土御門天皇」第八三代天皇。名は為仁。後鳥羽天皇第一皇子。一九八四年、四歳で即位。在位一二年。北条氏の専權を喜ばない父が討幕計畫を起し、承久の乱となる。乱後、後鳥羽・順徳の遠流に自ら幕府に意を伝えて土佐に配流後、阿波に移った。風月を楽しみ和歌を詠じた。建久六・寛喜三年（一一九五・一二三二）〔附〕ミカドテンノミカドテンノ

つちみかどどの「土御門殿」藤原道長の邸。土御門の南、京極の西にあった。*紫式部日記寛弘五年秋「秋のけはひ入立つまに、土御かと殿の有さまいはむ方なくをかし」。*大鏡「四道降入道どのの土御門どのにて御遊あるに」

つちみざ「土御座」〔名〕地べた。地面。*茶方言雑集「土御坐（ミザ）土べたに同」〔附〕①地面。地べた。佐渡46。長野市518。②土間。長野県上田520

つちむぐり「名」〔むぐり〕地潜の異名。〔附〕①全身の色が黒く、腹が淡黒な蛇。佐渡46。②春早く出る赤黒い蛇。群馬県多野郡万場240。③土中にある真白なきこ。食用になる。青森県三戸郡118

つちむろ「土室」〔名〕①土で塗りこめて作ったむろ。また、地面を掘ってつくった穴倉。*色葉字類抄「無戸室 ツチムロ」。*東北院職人歌合八番露とのみ塗りやる袖の涙こそつちむろでははされざりけれ。*改正増補和英語林集成「Tsachimuro ツチムロ 簀」。②塵芥を灰にして貯えておく小屋。土小屋。灰部屋。〔附〕①櫛之目。②櫛目。③櫛目。④櫛目。⑤櫛目。⑥櫛目。⑦櫛目。⑧櫛目。⑨櫛目。⑩櫛目。⑪櫛目。⑫櫛目。⑬櫛目。⑭櫛目。⑮櫛目。⑯櫛目。⑰櫛目。⑱櫛目。⑲櫛目。⑳櫛目。㉑櫛目。㉒櫛目。㉓櫛目。㉔櫛目。㉕櫛目。㉖櫛目。㉗櫛目。㉘櫛目。㉙櫛目。㉚櫛目。㉛櫛目。㉜櫛目。㉝櫛目。㉞櫛目。㉟櫛目。㊱櫛目。㊲櫛目。㊳櫛目。㊴櫛目。㊵櫛目。㊶櫛目。㊷櫛目。㊸櫛目。㊹櫛目。㊺櫛目。㊻櫛目。㊼櫛目。㊽櫛目。㊾櫛目。㊿櫛目。

つちめ「土目」〔名〕土壌の性質。土質。*西洋開拓新説緒方正沢総論「先づ能く其地の土質（ツチメ）氣候等を熟察し」。*歌舞伎・有松染相撲浴衣（有馬猫騷動）五幕・元植木屋をしなすつたさうだが、此の麻布辺も土目（ツチメ）はよし」

つちめ「樋目」〔名〕樋を打ちつけて付けたしるし。また、その跡。*浄瑠璃・唐船断今国性爺中「清めの鋤めを入れ、鋤を切て指上よとの仰せ」。*くれの廿八日（内田魯庵）「宝石入（たまいり）と樋目（ツチメ）の指環を穿めた真白き手」〔附〕①櫛目。②櫛目。③櫛目。④櫛目。⑤櫛目。⑥櫛目。⑦櫛目。⑧櫛目。⑨櫛目。⑩櫛目。⑪櫛目。⑫櫛目。⑬櫛目。⑭櫛目。⑮櫛目。⑯櫛目。⑰櫛目。⑱櫛目。⑲櫛目。⑳櫛目。㉑櫛目。㉒櫛目。㉓櫛目。㉔櫛目。㉕櫛目。㉖櫛目。㉗櫛目。㉘櫛目。㉙櫛目。㉚櫛目。㉛櫛目。㉜櫛目。㉝櫛目。㉞櫛目。㉟櫛目。㊱櫛目。㊲櫛目。㊳櫛目。㊴櫛目。㊵櫛目。㊶櫛目。㊷櫛目。㊸櫛目。㊹櫛目。㊺櫛目。㊻櫛目。㊼櫛目。㊽櫛目。㊾櫛目。㊿櫛目。

つちめくら「土盲」〔名〕室町時代以後、幕府が公認した盲人の団体である当道とうどうに加入していない盲人をいやしめていう。地位の低いめくら。土座頭（じざと）等。*叢書本謡曲・小林「いしうたへ此御頭（つちめくら）の去来」。*非指・本明文選「六路頭（つちめくら）の去来」。*非指・本明文選「六路頭（つちめくら）の去来」。

茶碗銘(風雪)「月待宵のやみをさぐり、闇夜に鼻をとられしは、をのをのつちめくらにの交はりなるべし」
 ・俳言集覧「土首(案内者六月十九日座頭京)あがりたる官なれども官代なければ土首(ツチメクラ)にて葬すも多し云々」

つちもち【土持】(名)土木工事、建築などの際に、益(も)ちなどを土を運ぶこと。また、その人。雲形本狂言・節分「津の国の中島に、中津川原をせきかねて、土持(ツチモチ)が持ちかねて、しいちもちせいで」歌謡「業平躍歌」土持はえ持たいで、せん持は握越す、畚(もう)この畚(も)このその下にこそ千鳥足は踏め」松翁道話五・上「御大名の行列に、沓籠持も槍持もなければならず普請するに土持も音頭取もなければならぬものぢや」〔実直・繪之〕 ②

つちもちち【土綱】(名)植物「つちとりもち(土鳥綱)の異名」

つちもの【土物】(名)①畑で栽培してとれるもの。野菜など。②「つち(土)の物(もの)に同じ」。〔実直・繪之〕

つちものだな【土物店】(名)野菜などを売る店。八百屋やおや。青物屋。歌舞妓年代記「七・天明九年「次は神田の土(ツチ)もの店(タナ)。料理のあんじは安の平兵衛」統鳩翁道話二下「あさ五百文で土物(ツチモノ)だなので大根を買て、其日一日江戸中を大根大根と泣きまゐる」

つちもん【土門】(名)築地(いじ)のなかにあけた門。土構門「つちがまえもん」・吾妻鏡「寛喜二年六月九日「後藤判官下部一人悶絶、則纏」延出」

つちまじ門「自中院頻招請、雖怖壁耳、依難逃乘輿、入北土門出逢」

つちや【土屋】(名)①つちむる。岩屋。土窟。改正増補和英語林集成「Suchiya ツチャ 窟」②壁土や砂などを売る人。また、その店。改正増補和英語林集成「Suchiya ツチャ 土屋」訳「土または粘土などを売る人」③「つちやぐやくやく」ら「土屋倉」の略。古今著聞集一・三〇「兵衛尉に成り侍らんとて当社の土屋を造進したけり」・高野山文書「延元二年三月一五日・又太郎垣内屋敷売券」(大日本古文書五・一〇三三)「此四至内土屋かや屋在屋敷共此内なり」〔実直・繪之〕 ④は団

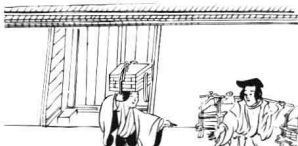
つちや【土屋・土谷】姓氏の一つ。〔実直・繪之〕

つちやいはるな【土屋直温】幕臣。江戸後期の刀剣研究家。江戸の人。荒木一滴斎甫秀について刀剣鑑定を學ぶ。列侯、諸士、刀工、研工と交わり、名剣宝刀の學を、拓本をのこし、土屋形といわれる。

天刀二喜永五年(一八八二)



土門 (年中行事絵巻)



土 門 〈年中行事絵巻〉

